
琉球の海で40年間： 海洋生物調査日記

coral

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琉球の海で40年間… 海洋生物調査日記

【Nコード】

N0045Q

【作者名】

c o r a l

【あらすじ】

本旅行記を出版目的で仮に公開する目的は、学部学生時代から琉球列島の自然、とくに海が大好きな私が40年間に渡って断続的に海洋植物の分布を調査した際に経験した、海でばかりでなく陸^{おか}をも含めたいろいろな出来事を提供し、琉球地方の特徴を楽しんでいただくことができるかどうかを知るためであります。琉球列島の通^{ツウ}になるための細かな、とくに本土復帰数年前から復帰直後までの比較的昔のその、情報としての価値もあります。

（前書き）

本旅行記を出版目的で仮に公開する目的は、学部学生時代から琉球列島の自然、とくに海が大好きな私が40年間に渡って断続的に海洋植物の分布を調査した際に経験した、海でばかりでなく陸^{おか}をも含めたいろいろな出来事を提供し、琉球地方の特徴を楽しんでいただくことができるかどうかを知るためであります。琉球列島の通^{ツウ}になるための細かな、とくに本土復帰数年前から復帰直後までの比較的古のその、情報としての価値もあります。ぜひ反応を下さるませ。好意的な反応を頂くことができたならば15万字くらいになるはずである残りの野帳からの転記を進めることにし、今回は転記済みの内から最初の部分だけを示します。

ただし、海から民宿に帰ってからの野帳への当日の思い出し記述なので、忘れぬうちにと急いで手書きで書きなぐったせいで、判読不能の箇所が時々出ております（へへへ）。後日解読できるはずなので、有り得るであろう漢字の誤変換とともに、転記作業の完了までは放置することをお許しくだされたし。適当な転記量が溜まった時点で新版を上書きアップする方式を採ります。近年分だけでも野帳の50ページ分あることに加えて学部の卒業研究の頃の分が未転記なので日数が掛かります・・・転記の単純作業は面白くありませんので（へへへ）。

話を読み進むことを阻害するかも知れぬ点があります。それは、海洋生物の和名および属名（ラテン綴り）の列举がけっこう出現することです。これは本旅行記の性質上致し方無いことですが、名詞の列举はいかにも芸が無く、単調でありまして、読者には面白くありませんから、脱稿したあとで写真を掲載するようにすることを考えております。もし列举があってもかまわねばその旨報告願いたし。

e mail magazineでしばらく配布していた時期があ

ったので、それを元の全体用ファイルに戻して文を改訂している内に不注意で重複させてしまった箇所があります。論理がつながぬパラグラフがあるということです。「今回は」との次回配信予約とばが付いているパラグラフは多分これです。脱稿したら全体を整理しますので、それまではお許しください。

さらに、このsiteではtext fileでuploadする決まりなので地点や海藻の外形などの手書き線画が失われ、それら図の中の文字だけが残っております。お見苦しい点をご容赦ください。

研究生活の始まり

大多数の方々にとって海の中はまだまだ異次元の世界であり、ダイビングを趣味とする主に若い人々以外には海洋植物とくに花と種子とを生じずに胞子の類で新しい個体（子孫）を作る海藻の種類としては普通、食卓に上るワカメやコンブやアサクサノリや振り掛けアオノリしか思い浮かばぬと思います。しかし日本列島沿岸だけで3千種と言われる海藻が繁栄しているのです。しかもその中には、陸上の種子植物、すなわち花と種子とを作って新しい個体を生産する植物群よりも体の作りが信じられぬくらい繊細で美しいものがあります。

川にも水草という、水中で花と種子とを作る種子植物が生育しているように、海の中でもそのような少数の種類があり、「海藻うみくさ」と呼ばれます。一方、日本語で2文字からなる漢字熟語がすぐ同音異字になる弊害の好例が、この語の音読みが同じで生物学的にはまったく異なった群である、種子を作らずに胞子を作って増える「海藻」なのです。この旅行記では海藻を主に調べてきた過程にまつわる出来事を書いて行きます。

年代順に記憶をたどって書くことにしたので、面白くないはずの伝記的な話から入らざるを得ません。さて私の研究分野の決定に影響を与えた時代は、小学校入学以前にさかのぼります。伯父が日本の浮遊生物学（プランクトン学）の初期の学者であったため、法事で親類の者達が集まったときにはいつも私の家に来て、琉球から樺太までの採集旅行の話をいろいろ聞いて育ったことが海洋生物学の研

究者になろうと志したきっかけです。大学に入って卒業研究では植物のほうが好きなので藻類学研究室に所属しました。

さて、今を去る40年ほど前、大学学部の四年生の時に「八重山諸島（石垣島と西表島）の海藻の分布」という課題名で卒業研究をした時から本格的に研究生生活に入ったのですが、自分でこの課題を考えた理由や動機が今となっては思い出せません。多分南の熱帯の島々に対する冒険心があったことは確かです。当時は島への旅行に凝っていて、旅行案内を収集しておりましたから。しかし当時、沖縄に関しては旅行案内がまともなものはJTBの小型本だけでしたから情報が乏しく、そのことが冒険心をくすぐったのでしょう。その当時は琉球列島はアメリカ軍に支配された外国であったことも私を異次元空間へと誘ったことは確かです。その高等弁務官は地球上でもっとも強力な権力者（というよりは完全な独裁者）であったのです。彼がNo!と言えば理由の如何を問わず何事についても絶対に認められませんでした。労働組合員と学生運動家は入域を許可されぬ時代でした。

法的には外国ですから、訪れるのにはパスポートが要りました。はじめてタイプライターを使ったのも入域（入国とはいわず）許可申請書をタイプするときでした。そこで使った英語は修行しておらぬ段階なので当然直訳ですから、実際には使われぬ難しい単語（herbarization）を使ったために戻ってきた副本にはペン書きでseaweed collectionに直して有りました。米軍政時代に二回入域した証拠の二冊のパスポートは大事に保存してあります。その写真を見ると32年前には髪の色が真っ黒なのが印象的です（^v^）。

というわけで、私の分類、系統、分布に関する分野の研究は琉球列島の八重山諸島から始まったのです。22歳でのはじめての、当時

の準外国であり、またとくに西表島については文字どおりの原始の島でしたから、そこでの1ヶ月の生活は強烈な印象を残しました。その後大学院およびそれに続く研究者としての修行時代にも3年おきくらいに訪れて調査を続けましたが、出来事の記録がありませんので、突然1998年に跳ぶことになります。1998年度にWWF（世界自然保護基金）から研究費を受けて5度目くらいの渡島を果たすことができたばかりか、何という運命のいたずらか、JICA（国際協力事業団）からの依頼で西表島で海藻養殖に指導に派遣される海外青年協力隊員を研修するために同じ年に2度目の渡島をすることができるとは何という幸せであろうか。それくらい八重山の自然、特に珊瑚礁の海は素晴らしいのです。本土復帰前の渡島の際に土地を買って研究所をプレハブで建てる計画を持っていたくらいです。これからいよいよ実行したいと考えておりますが、実現するかどうかはわかりません。というのも、西表島は国立公園ですから土地の売買は禁止のはずなので。JICAの件で12月に訪れたら不動産屋に寄って尋ねるつもりです。ところがその素晴らしい珊瑚礁への開発問題が・・・その問題と復帰以前の様子については次回に。

派遣されるこの青年は26歳で、派遣先はMaldives共和国です。指導する技術は寒天の原料になるEucheuma（キリンサイ属）という紅藻の仲間の種の養殖です。これだけならば別に話題性が無いように思うでしょうが、さにあらずして、この人は法学部出身なのです。なぜ人文系の学部出身者が生物生産の技術指導を行なうことになったかが不思議ですよ。それは、簡単に言うとな手国からの要請で先代からの隊員の時に話しが始まったことが一つの理由です。二つ目の理由は、先代の派遣隊員も今回の人も同じく、村落開発を指導するのが本来の派遣目的であったのですが、しかし、現金収入を指導する必要があって、その仕事として最近熱帯の発展途上国ではやっているこの種類の養殖を指導してくれということに

なつたと聞いております。

ところが、海藻学についての完全な無知識、それも彼の経歴書では現地の人に信頼される技術を身に付けたいと書いてあった、を指導するとは、どうなることやら幾分不安でした。その不安は、連絡の手違いで期間が5日間で実施することになったことでますます増してきました。でも素人に技術を指導するなどということは、またと無い経験とを考えてやってみることにしました。しかし、専門知識を与えたら良いということで講義だけで済ますというわけには行きません。なぜかというに、技術を指導しに行くのですから、体で経験する必要があるからです。つまり、臨海実習が不可欠です。その上、講義は人文系向けだと生物学からはじめて、その1分科である藻類学を少し掘り下げて、その後でようやく目的とする属および種の性質とそれを応用する養殖技術という3段階で実施しなければなりません。加えて12月1日からはじめますから、目的種はほとんど枯れて無くなっているのです、現物を見つける困難さも有ります。しかし研修生は26才という青年ですから、1日に臨海実習を6時間、室内講義を5時間という計画で強行することにしました。

海藻の調査では、干潮時の前後2時間を海中活動に使います。それも講義と違って夜中には実施できませんから、どうしても講義の方は臨海実習の後で実施するしかありません。学部 of 学生なら寝てしまいうでしようが、アメリカで修士を取った、動機付けの強い研修生ですから大丈夫かと思いましたが、やはり、海に慣れておらぬせいで疲れたようでした。面白いのは、この研修生は2年振りに海に入ったとかで、「海酔い」したと言ったことです。この表現は、初めて聞いたので、意味を尋ねたら、うねりで体が浮いたり沈んだりすることで平衡感覚に影響したとの意味でした。本人には悪いけれども、笑ってしまいます。

二人とも琉球大学の西表実験所の宿舎に泊まったのですが、寝室の電話が内線さえも通じず、本館から受けるだけなのは少し不便を感じました。ここも一般琉球の民宿と同じく湯船はなく、シャワーだけでした。海から帰ったら湯船に入りたいけれど。西表にある大学の実験所にはもう一つ東海大学の臨海実験所（琉球文化研究所と併用が公称）がありますが、こちらは海が主目的ですから、湯船があることを期待して、次のWWFの調査で訪れる3月には泊まらせていただくつもり。

さて実際にやったことを報告する前に、西表に渡ったら最後、物品特に学術上の自由度はゼロになるので、前もってフェリーの出港地である石垣島でただ一軒の理化学器材薬品店であるヤマト商会から渡航前に仕入れを頼んでおいたものを宿泊施設に送っておいてもらわねばなりません。我々の場合にはフォルマリン10リットル入の軟塩ビのビン（ぐにやぐにや）5つを送ってもらいました。ところで、この薬品代が3000円ですから、西表へのフェリーの運賃（人間で2000円）を加えるとcost performanceが悪いように思うが、実は、フェリー運行会社の二社の内の安栄観光の方が無料で荷物だけを運ぶサービスをしているのです。当然着いたら受取人が波止場まで引き取りに来るのです。しかし、さすが西表やなあと感銘を受けたことには、フェリーが帰ってしまって誰もいなくなった波止場に、まだ引き取り人が現れぬ荷物が放置されており、時折自分の荷物が着いたか自動車で見に来る人がいて、違う荷物だとそのまま帰ってしまったて、荷物だけが1時間もぽつんとおいてあったことが有ります。なぜそれがわかったかというと、珊瑚礁の端に渡してもらいう用船が来るのが遅れて待っていたから。

西表での生物調査にはレンタカーが必須です。臨海実習では夕方帰る日もあるのでとくにそうです。バスは1日4本くらいしかない上に夕方前の5時ごろで終わるし、タクシー会社はあっても（実は西

表にバスやタクシーがあるということは、復帰前に二度渡島した私としては未だに信じることができぬ社会現象なのであるが）潜った近くに公衆電話機が無いし、電話を貸してもらおう民家も無いところで潜っているから。さらには、食事の問題で、弁当（石垣から運んできて、上原Ⅱフェリーの着く船浦の近くⅡの川満商店かわみつで売っている）を買うのにも。毎日レンタカーでこの弁当を一度に3つづつ買って飢えを凌いだのです。朝の10時ごろにフェリーで着くのですが、売切れてしまった時があった。

臨海実習は海の素人が研修生なので、海藻の一般的な採集を行なったのです。砂浜しか経験したことがない人には珊瑚礁は歩き方と履物から注意を与えなければなりません。しかし、そこまで私が気が付かず、初日の南風見田では靴下で海に入らせてしまったことは、申し分けなかった。中型の展望台風の休憩所があり、そこで弁当を済ませてから潜ったが、採集を済ませてオカに上がったらカラスにほじくられて、あろうことか採集用具を入れてきたビニール製の大型バッグの中に糞を垂れてあった。こんな所にカラスの被害がなぜ生じるかを考えるに、ここはキャンプを許しており、1年中テントで住み着いている者達がいて、残飯を捨てるからである。琉球では珊瑚礁を保護するために海岸でのキャンプは全面禁止にすべし。または、許可証発行方式にして期間を1週間以内などに限定すべし。シャコ貝を食料に採って絶滅させたとして大原（南東のフェリーの港のある部落）の土産物屋の主人が怒っていた。現地人も採っているのではあるが。

臨海実習の二日目からはいよいよ目的の種を入手すべく珊瑚礁の端まで調べるために、文献からその種が生育していて宿舎からもっとも近い鳩間島との間に横たわるインダビシに渡してもらうために前日電話で予約しておいた船が約束の時刻になっても来ておらぬ。45分待ったが来ぬので、定期便である郵便船に便乗させてもらうこ

とにした（千円）。この船は乗船可能人数は516人と思った。我々二人のほかには中年女性が二人お客となった。黒潮を横切ることになるので、天気は良かったにもかかわらず小さな船は翻弄され、それが面白かった。鳩間島の人口は40人前後。このような少ない住民数の島であつてもさすが日本、簡易郵便局と小中学校があるのです。この郵便局では現金が引き出せず。学校はというに、船で相客であつた女性と郵便局の脇の堤防前の海を見晴らす食卓風の台で1時間ほど泡盛でおしゃべりをした中でわかつたことには、地元の子供の在校生は皆無であつて、ヤマト（＝本土＝内地）の、それも大都会とその周辺の不登校生徒が転地療養で転校しているとのことなので、大いに驚いた。その方法によって意図的に廃校を免れているということであつた。ううむ、ですね。その女性はその中学校の生徒となつている子供に久しぶりに会いに来たのであつた。おしゃべりしてから潮が引いたので潜りに行く道すがら、その学校の校庭を横切つたが、そこで行き違つた中年女性二人組みは東京と千葉との在住者であつた。さて本題の海の様子はというと、南東の角で潜つたが、潮通しが良くて透明度が非常に高く、適度な発達の珊瑚の大岩が適度な距離で配置されているので、珊瑚礁の初心者には適当である。しかし、海藻の種類は少なく、同じ種が多くはえていた。帰りは郵便船が5時に出港なので時間が有りすぎる。郵便船の船長に紹介してもらつて用船したら、行きの女性の話しの1万円とは違い、3千円で済んだ（私はJICAに代わつて立て替えるだけではあるが）。

琉球大の宿舎の公衆電話でCARDが使えぬせいで、当初すべて用船に使う予定であつた屋良商店に連絡できず、3日目に直接行つたらえらく文句をいわれてしまった。儲け損なつたせいですね。カミさんが石垣に用事に行つたから店番を自分がせんらなので今日は出せんとのこと。ではと、正規の定期船である、すぐそばの船浮海運の事務所に行つたら幸いにも当初の予定の一つである船浮部落へ

の便が今日出るとのこと。ここは対象種の一大生育地なので期待が膨らんだ。この船浮部落は、西表の西南の少し出っ張った部分の、岬が3本ある中のもっとも東にある岬の東海岸に存在する。これら3本の岬はすべて道路が通っておらず、西表で2番目に古い部落である白浜から船でしか行けぬ場所なので、定期船を使った場合には帰りが5時台に出港なので暇な学生か生物調査研究者以外にはスケジュールの点から訪れることが比較的難しい場所である。次回は船浮部落の話から。（分断している、★に続く）

1998年7月23～1999年6月21

自宅から羽田間の交通費＝豊田―浜松町780＋モノレール（羽田空港470）X2＝1420

渡航切符類

空…trans ocean air line

船…大島運輸、13/aug発⇒16日着；那覇―東京

予約購入は13/july

石垣―那覇…夕方発で戦中1泊で朝に着く便で琉球海運で通しで間に合う

器具…

Rope…ミリオン測量Rope、glass fiber made, MSR100（100m）＝6k（実売価格5k）

★ 潮流で中央が流されて湾曲したので意味が無い、中止した。

採集袋…折りたたんで売っているサラシ木綿10mを折り目で切断すると30x30cmとなり、14袋を作る。⇒

10地点X2島＋α＝呉服屋（最近普通の衣料品店では売っておらず）で3反買って作る；豊田駅の南口近くの伊勢屋で1050x3＝3kに負けてくれた。

Formalin…10L入り軟塩ビ直方体容器X2で4地点（1地点で2回）…白保、米原、大原（西表）、祖納（マルマボンサン岩、西表）。

大和商会（理化学器材屋）…電話（2）2011、バスターミナル近く、フォルマリンを沖縄から仕入れて売っている、3500円、土曜休業。

到着日の気温32度、晴れ、湿度高し

1998年7月25日、白保、気温32度
干潮2…40、バス賃350円

<礁面のProfile>

礁縁との中間に浅瀬があり、干潮前後に完全に干出する。

米原などの他地点では写真と地形記述とを根拠として概念としてのラインを設置し、大体左右50cm幅で採集した。

この概念ラインは汀線での特殊な形の岩と礁縁までの中間の岩の左右の出っ張りを目印として選んで図を記録しておく。カメラでも記録する。

人員は最低二人要る。望ましくは礁縁までの海図上の幅（m）は
／100m

履物はサンダルは厳禁↑深場で泳ぐときに、かかと側がfootから離れてブレーキとして働くので進めず。また、岩を踏んだときにfootがすべってとがった岩を踏んで怪我をする恐れがある。
⇒felt底のゴム靴（足首が擦れて痛かったかも知れぬ。⇒確かめよ）

外の崖からの帰りは遠いので漁師のボートがおれば便乗させてもらう。

強い潮流でロープが流されて曲がるので使わぬことにする。目印を目測することだけでかまわぬ。

7月26日、米原、干潮3…14

証拠にするための他にウェブに載せるためにも写真撮影せよ。

日祝はバスが午前は10…30⇒別名椰子林11…30の一本だけ。帰りは16…30の一本だけ。

採集対象とするに足る植物がほとんど無くて1…30前から始めて礁縁の外で十分できた。

バス賃720x2

礁縁の外で潜ったが、海藻はゼロに近い。小型の紅藻の叢がoverhang岩にまれに見たのみ。

礁縁の外の潮流の力は強く、干潮時に向かっては沖に引かれ、干潮を過ぎると軽いbeach sandalの足先が陸側の礁にたたきつけられる。

海藻が見られないのは潮の力が強くて胞子が付かぬためであろう。また縦の面では砂が皆無なので非常に硬いサンゴ（キクメイシの類）には、とくに生きたのには根を下ろすことができぬと考える。

礁原は堆積した砂、こまから土の量が多く、それに覆われた汚い、枝サンゴの折れた白化物が多量に存在す。

水泳客が多い。台湾語の案内板がある。

盗難が多いと売店の女店番が言えり⇒財布とカメラとはロッカー（200円）に入れた。

帰りのバス停は往路よりも遠い場所にあった。

注意…サンダルはやめよ。ダンスシューズ的なズック靴が良いかも。

7月28日、西表の舟浦、到着当日なので採集はせず。

安栄観光も八重山観光フェリーとともに、到着したら岸壁にワゴン車が待っており、乗客各自の宿に無料で乗せていってくれる。

ミドリ荘は新しくて清潔で、各室にクーラーがある。クーラーは無料だがその電気は6時に入れるのでそれまでは使えず。

前の浜は水深10-30cm、で1kmくらい沖まで続く。アマモ場が点在す。ハブクラゲの触手がアマモ場の中に展開していたのに気づかずにジャージ製のズボンとズック靴との隙間を5本の触手に巻き付かれた。すぐに波打ち際に走って戻ってしゃがんで貼り付いている触手を手で剥ぎ取ってから普通のクラゲに指されたときの治療法である砂で何度もこすった。そのあとすぐに浜の前の人家に頼んだら250mL入り食酢を二本かけてくれた。あとで腫れるから診療所に行けと言われたがYHの主人に尋ねたら今痛くなければ心配無いとのことなので放置した。予言どおり、なんとも無かったが、刺された痕が足首を取り巻いて今も残っている。

7月29日、西表の大原、バス賃760x2。

帰りのバスが無くなっていたのでヒッチハイクした。

南風見崎へ出た…道順は次のとおりである。バス停から直進し、交差点（信号有り）を右に直進して30分くらいでNTTの鉄塔の手前を左に曲がり（舗装した左に曲がっている農道の二本め）、右に曲がって直進して海岸直前のトラクター？回転場を左に10m行くと右の藪の中を踏みしだいた浜へ出る踏み分け道が現れる。沖合に平たい大きい岩がある。

7月30日、西表の白浜、18:00時干潮

舟浦のミドリ荘からのバス賃…350x2

<野帳の次のページに続く>

バス停がある舗装した船着場の沖に向かって右側はマングローブの泥の浜であり、海藻は皆無である。

私が以前に採集した場所はマルマボンサン岩であることが判明した。

さんご礁は網取と崎枝で発達す。道が無いのでこれらの先端に行くには船を雇わねばならぬ。…到着してから2h待たすか、時刻指定で迎えに来させるか船頭を選ばせる。

八重山観光フェリーも安栄観光もバス停から送迎バスに便乗させてくれる。

7月31日、西表の上原、18…45時干潮

琉球大学の熱帯農業研究所に電話してformalinを分けてもらう。

白浜―網取間の備船の代金を聞く…電話5―6132

郵便局で入金すべし。

おもに枝サンゴが立派で成長が盛ん。

8月1日、石垣に戻る

YHの料金…3550(2食付き) x4泊=¥14200

1999年

3月12日到着した。

3月13日、ナイフを買うなど用事をする。

3月14日、星野で採集す。干潮…11…15、バス賃…620 x
2=

採集物はあしたモヅク用の缶を入手するまで3階の裏口において

おく。

浜への道順…バス停の手前を行くと道が二股になっている場所を右へ入る。

汀線から50m沖までは茶色の泥底となっている。そこを過ぎると海底の色は白くなるが、粉状の底質であり、歩くと舞い上がる。100mくらい沖で少し粒度が増し、海底の石を取り上げたときのみ泥が舞い上がる。

沖では植生が豊かなのに驚いた。しかし、風が強くて曇りであったので水温が低く、潮が差してきたこともあって、目標の最も沖の干出岩の直前で中止して戻った。

写真はパノラマも加えた。採集ラインは最初の数枚の画面中央の前後の岩の間となった。

注意…

今後の石垣への到着は土日以外の曜日にすべし。フォルマリンと缶との入手が閉店によって不能となるので、採集したものの固定処理をできぬことになる。

遠い場所には遅い干潮時刻の日に行なうべし。バスの時刻（行きと帰りとも）が問題である。

礁縁の外は別にまとめて船を雇うか。

3月15（月）、白保、06:00で雨、0700、バス350x2

風が強く、上がってから寒いことを恐れる。

海パンのすそまで海に入っただけだが収穫多し。

カサノリとタノモグサが多量。しかし種数はさほど多からず。

処理用のフォルマリンはヤマト理化器械に12月に預けたものであり、しかも缶の中に塩ビbag入りのフォルマリンをびったりはめ込んだものなので漁協に缶の購入を頼まずに済んだ。

宿に帰ってそばを食った帰りの不動産屋で次の土地情報および海情報をもらった。夜潮のほうが良く引くし、貝が動き出して取り易くなるので夜に潜っているとのこと。また、当然別荘用地の相場も

聞いた。玉取崎は礁の幅が広いので潜ろうと思ったら、不動産屋の話では満潮の方向が違うので危険とのこと。屋良部半島の崎枝は一周道路有り。

3月16（火曜）、干潮12…36、採集開始11…30、バスに乗る…10…30、160円x2

昨日の悪天候は昼に回復して晴れとなる予報なので近場で豊富な真栄里を狙った。

バス停は支庁前下車、全日空ホテルを通り抜けて浜へ。バス停の少し手前に専用舗装道路がある。全日空ホテルの前の堤防造成が許可された根拠となる法律条文を市役所に聞いて抗議する。

「植生の様子」

紅藻が被覆の70%、緑藻は汀線付近の干出帯の多量のヒトエグサを除くと漸深帯ではほとんど無しであってイワヅタ類は1箇所で1個体のみ。カサノリの群落は2箇所のみ。褐藻ではカゴメノリとウミウチワ類は多い。カゴメノリの大群落（というよりは1個体が展張したらしい）には驚いた⇒水中写真をとるべし。

全日空ホテルの前の海に人工的に堤防を築いて三方を囲ってある（写真有り）のは問題である。ここは植生が豊かなことが現地の海人の話でわかっている。

3月17（水曜）、干潮13…15、平野、採集開始12…00、バス…往路10…15復路17…50、1100円x2

磯焼けかと思われる状況。汀線近く30cmまでは砂かぶりのカイニンソウのみがピリヒバ類の石灰藻を多量にかぶって繁茂す。

まれに小型のカサノリ類が有り。

手前500mが浅くて大体平坦、沖に500mが深い（色が）？
天気が悪くて浅い範囲のみで止めて帰りかけたら雨が降ってきた。
浜の直前に「流れ速し」との市の警告板が立っている。⇒30年位前に小学生（？）7人がいかだ遊びしていて遭難した。

5月の天気がよいときに礁縁まで再挑戦すべし（誰か一緒に行ってくれるものを誘う・・・学生でもよし）

3月18（木曜）、干潮13…54、伊原間、10…15バス発、11…30くらいに着、採集開始13…00、バス…850円x2
ターミナルでの2名からの情報の総合では礁の外側にも植生は多い、礁の幅は1km。

採集目標…多形が著しいイワツタやホンダワラ類の類を多量に取って形態とDNAの分析をする。

前之浜で刺し網漁をやっている。

汀線から30mまではイバラノリ？が多量に繁茂し、他種は少ない。しかし、雨の後のせいでヘドロがかぶさって最悪。500m？？？は浅く、500m？？？は深く、はつきり分かれている。

バスターミナルの伊原間食堂のおばちゃん（海人か？？？）の話では平野の前はカイニンソウだけ、東海岸が種類が多い。久宇良の前と伊原間の東も多い。⇒海図では東岸と北岸との礁の発達は同じ程度であるし、逆に久宇良が多種の植生が豊かというが、礁の幅は狭いので説明が付かぬ！！！！

3月19（金曜）、干潮14…35、久宇良、10…15バス発、11…15着、採集開始13…30、バス…1600円x2

脱いだ海パンを置き忘れたので取りに戻りたいので1145／1200でバスを戻してくれと長浜運転手に頼んだらやってくれた。さすが沖縄、南国のルーズさに感謝。

浜の近くの宮城興業（売店）で帰りにシャワーを使わせてもらった。近くにダチョウ二頭が趣味で飼育してある。この部落は戸数が17戸。この売店には崎枝のと同じ赤外線来客センサー（ピンポン）があるので予期しておらずにびっくりした。売店の婆さんは戦争中に津の東洋紡績で働いていた。津の出身ということで少し話し込んだらチーズやケーキの厚切を無料サービスしてくれて気前が

良いことに恐縮した。海水浴場になっている⇒夏に一週間泊まる人もいるとのこと。

「地点の残りの案」

北岸／南岸の比較用に栄と伊土名と米原とをヒッチハイクで1ー2日でやれ。大藪が行けば運転手をしてもらえるが。

川平の外側、川平石崎、平久保（多いとのこと）で不可の日と含めて実施するしかない。

帰りの中継地である伊原間の食堂の人に栄と伊土名の植生を尋ねる。

アイデア・別荘用地を買う場合は浜への道の分も含めて買うべし、またはそばに道が付いているべし。

3月20（土曜）、干潮15・17、崎枝、12・13バス着、帰りは17・00くらい。採集開始13・30、バス・470円x2
多形が激しい属を多量に採集して電気泳動する（イワヅタ、ホンダワラ類など）。

強風と霧雨なので干出面を歩きで観察した。WWFに植物（海藻と海藻ともに）保護区域指定を環境庁に働きかけよと報告に書く。

風が強いにもかかわらず表面の水温が高い⇒黒潮が直撃しているのか。黒地に赤紋様のアゲハを捕まえたが、片方の羽に欠けた部分があるので逃がしてやった。

次回はバス利用ならば初めの曲がり角でヒッチハイクすべし（学校まで）。

多種が遠浅で0mとなる；500m沖で深くなる。

海藻と海藻ともに研究所建設の最適地なりと思ったら、宿の松屋の話ではここは台風の際に強風がひどくて困るとのこと。

崎枝バス停の先の売店の二つ向こうの道を行き、学校の前を通り過ぎて右に曲がり、1mで左に曲がるとすぐに護岸がある湾。カタメンキリンサイとトゲキリンサイ？の打ち揚げが有り⇒ほぼ干出帯の沖の500m幅の礁縁までの普通の深さの礁面部分に生育のはず

⇒二日がかかりで両区域を調べることと成る。

崎枝バス停は上りと下りとに売店があるが、下りは事務机にピンク電話で広く、イス付で温かく、カンビール220円・・・伊原間 drive innの350円は何だ。

伊原間や川平のようなバス路線の分岐点以外は平野のような終点でさえもバス停に時刻表板が取り付けてない⇒このわけは後日判明す。

「随筆か投書で書く」

農水省の農道整備事業による赤土の海への流入問題。そこら中でやっておる。農水省は建設省に変わったのか。

準備…携帯ラジオ（胸ポケット型）を買う。

3月21（日）、干潮16…02；採集開始15…00、バス賃470x2、崎枝

海図上のサンゴ礁の縁まで干出直前の平坦面が続く。左の最先端の崖付近までは砂底、そこからはサンゴ塊と岩盤が出現す。前面で植生（種数十個体数十被覆面積）が豊か。

シー・ナイフを左の崖の先端から湾口中央部の少し左寄りまでの間で落とした。

湾口までは長距離であっても、採集の帰りは崖の裾の岩盤を伝ってほぼ平坦なので歩いて帰れる。

湾口までは満潮と干潮との中間で採集するのが最適。干潮では干出直後なので潜れずに中腰でやらねばならず、少し風が吹くと小波が立って海中を透視できず不便である。

3月22は中止

3月23日、白保、350x2，地形上大丈夫なので1時間早く始めた。

3月24―26日は1906, 2041, 2206が干潮なので不能。

26日は西表への移動日&標本宅配処理日とす。

未採集地点は西表から帰ってから那覇へ行くまでの間に行なえ。

3月24、名蔵、19..00干潮、バス340x2、

干潮が遅いので1時間早くやったら遠浅のせいで大成功であった⇒2時間早くても良かった。

帰りは18..24

沖方向に500mは砂地で植物はカゴメノリ以外はほとんど無し。

その沖は植生が豊富。カサノリ天国。ホンダワラ類の種類が多い。湾口に刺し網が設置してあって透明なので危険!!!!。

3月25、川平の外側、バス580x2、15..00バス来る、帰りは17..55(西回り)か18..40(東回り)

バス停の少し手前を曲がって浜へ出る。その口の少し左はサンゴの種類多し。Soft coralの種類の方々と巨大さに圧倒される。潮流早く、流されて30m沖からは採集やりにくし。気温29度予報であったが、水は実際は冷たし。無節石灰藻類の独立塊がサンゴ群落中に多し。ヒライボ?の完全な球形10cmが多く、特徴的である。

3月26、西表へ移動。船賃2000円、平良さんに全沿岸について採集適地を訪ねて地点数を決め、石垣に戻って昼間の干潮で再度採集できる可能性ができた。

4月8日、西表から帰った、19..23干潮。

3月27、祖納(マルマボンサン岩)、干潮09..32⇒0910にもぐった。

翻訳5枚済ませよ⇒明日の夜に送信すべし。

12月と同じ植生状態であり、とくに豊かになったとは感じられず。

海草が多いのでジュゴンの餌場となりうる。

この巨大岩（島）の裏側は潮流が急速で危険。

3月28、10…34干潮⇒0900出発⇒09…30開始

YHから歩いてすぐ、1kmくらい。厚い曇り、終わって服を着替えたら雨になった。

500mほどほとんど礁縁近くまでサンゴ砂底であり、サンゴは無し。汀線付近から100mまではカゴメノリとホロハサボテングサと多量の種子植物帯となれり。種子植物は全幅で多し。礁縁が近づくとホンダワラ類の種類が他の地点に比べて少し多い感じであり、泥を被らずにきれいな体である。右からの流れが右の岬位置よりも沖に出ると強くなるので引き返した。カサノリとフデノホとが種子植物の枯れた繊維（？）にのみ着生していることが興味深い。全体として種子植物の良のほうが多い。海中は少し温かであって、体を海から抜くと少し寒かった。後から聞いた話では、左右の岬付近に性悪ダツが住み着いていて昼間でも突進してくるので死んだ人が居るとのこと。

3月29日11…26干潮、西表の赤崎、上原のYHでバス10…37/10…43白浜行き\110x2に乗って西表トンネルの手前で下ろしてもらう。

もっとも植生が豊かな1地点なり。浜への出口は美田良のみ。そこからトンネルまでは深い藪なので抜けられず。汀線直前ですぐ50cm深となり、泥で植生が貧弱と成る。30mくらい沖から豊かと成る。フデノホの長いものが豊富。無節石灰藻類とイワノカワ系が多し。赤崎の近くでは種子植物も多くなる。熱帯性の珍種である緑藻スズカケモを1点でのみ発見す。汀線近くは溜まり水的であっ

て冷たく、よどんでいやな感じであるも、30m沖でもっとも温かい水温（すぐ曇りでときどきひが差したせいではない）汀線近く5mくらいの浜は砂粒が大きく、かつひどくめりこむので林のそばを歩くべし。歩く距離が長いので帰りの目印として海底ケーブル標識に注意するしかない。

タカラガイの大型の2種を取った。汀線近くの数m。近くの他の個体はなく、おのおの1個体のみの孤独な個体。

50m、つまり赤崎付近では枝サンゴがびっしりで足の踏み場も無し。Soft coralはまれ。赤崎のそばは大型の岩盤が重なり合い、その上には生物無し、波が強いせいとか。礁縁は赤崎の30mくらい沖だが、帰路のバスが気になるし、上記の無植生も気になり、かつ赤崎を出ると一般に潮流が早くなるので止めた。

浜にはもぐり道具を干すのに最適な平たい岩が露出している。左右を見渡す限り人影無し・・・当然・・・バス停無く、浜からの出口無しなので。この情報をくれた不動産屋は本当によく海で貝を採っている海人であった。船浮海運の船長の池田さんと駐在の赤崎の＜幽霊話＋坑夫の骨の埋葬場所＞の話＋浦内川の岸の崖の風葬話にはぞーとした。

3月30日（火曜）、西表の船浮、12..14干潮、電話して白浜の金城旅館に移動した。

バスは10..37が第1便⇒船浮にいく場合は船が数便あるので出航時刻を調べて安栄フェリーの送迎バスへの便乗で。

網取ならば白浜を1055⇒船浮1105／1150⇒網取1210着

12月と同じ植生状態つまり貧弱で磯焼け的。港の左は貝も一杯あったが今は無し⇒港の前の左のほう良かったかも⇒6-7月にやったが無し。

スズカメモが多数のサンゴ岩塊の無効の左角（波の流れの下流側）に有り。根が珊瑚の狭い切れ目に入り込んでいるので掘り出しに

くい。

船浮海運の池田さんのところにカード式有線公衆電話がある！！！！

初代船長の妻が池田さんの家の新聞を届けて出て来たのでラーメンを食わせてもらえる場所を聞いたら私の家に来いと言ってご馳走してくれた。大阪の人であり、13年前に訪れて知り合って結婚したとのこと。元は雪が好きなので北海道か長野に家を建てて住もうと思っていたが、友達が沖縄の海はきれいよく、行ってみなさいよと言われたので訪れたのが運のつき。イダの浜は夏と3月にキャンプする奴が多く、ゴミを置いていくので困っているとのこと。

12-3月は雨が多い。

梅雨は無く、5-7月は冬よりも天気がよいとのこと。

3月31日（水曜）、西表の網取、13...00干潮

金城旅館に傭船で紹介してもらった大城爺さんは渡し舟で子供を本土の大学にやったといっていた。料金は5000円x2。

スズカケモの大群落が多数あって驚いた・・・この場所の特徴なり。

特徴・・・石灰藻（無十有節ともに）が極めて多く、すべてのサンゴ死骸に着生している。ホンダワラ類類が皆無なのが印象的。砂底がほとんど無いため、これは本当である。1個体も無し。サボテングサがほとんど無く、ヒロハサボテングサ皆無、標準のサボテングサがサンゴ岩盤の隙間の稀にあるくらい。イワツタ類も同様の傾向であって非常に小型のものがサンゴ岩盤のへばりついていただけ。

備船の大城が言うには、岩の沖へは潮が早いので出ぬほうが良い（大潮ではとくに早い）とのこと。

東海大学実験所の横地さんの報告のカタメンキンサイは網取と崎山とにあることになっているが、網取には皆無であった⇒季節性が著しいのかも。

4月1日（木曜）、崎山（岬の先端）、13…44干潮、昨日遠いのもう少し出してくれといわれたので備船料金は6000円とした。

特徴…石灰藻が多い、ホンダワラ類はほとんどラッパホンダワラ類のみ、スズカケモの大きい塊が数箇所有り。

湾口付近に近づくとき浅く平坦になり、植生が貧しくなる。湾の奥の砂地は種子植物が多く、水温が高い。湾が奥に深くへこんでいるので外海はうねりが少しあっても湾の奥は流れが皆無。枝サンゴが白化によって死んだものが積み重なって1mくらいの厚さがあり、立って歩くと膝まで沈んでしまつて傷を受ける危険性が大。これは網取の島近くと同じ。紅藻のコノハノリ的な、筋の入った種類がサンゴ塊の溝や裏側などの暗所に小さな群落をなしている。これはこれまでで始めて成り（よそで見たのは一回くらいだけ）。イワツタはほとんど無い（きわめて小さい個体が岩塊にぴったり貼り付いていてはがすことが極めて難しかった）ことは網取と同じであった。

崎山には砂地が多いのにもかかわずこうなのは不思議なり（奥は調べておらぬが）⇒潮流が直接あたる西側の特徴かも。一方、サボテングサ類はヒロハノサボテングサとただのサボテングサとがあずかあり。前者は岩塊の割れ目に極めてわずか、後者は砂底にまあまあの個体数を見たが、付着している石灰藻で非常に汚れている個体がすべてであった。カタメンキンサイは無いはず⇒やはり無かった。船の横を船浮の沖の海上中心で黒い蝶が海綿状1・5mの高さを飛んでいった。止まって休憩するところが無いにもかかわらず、偉い。サンゴ礁上の干潮前に着船できる地点は限られる場合がある⇒船

を乗り上げて私が降りられるようにするには砂浜に限るので…崎枝がそれである。

4月2日（金）、14…28干潮、サバ崎の先端西側のウンパナリ島との間、12…00出港、\5000x2。

汀線から20mまでは砂地にサンゴ塊が転がる。ヒメイチョウが多い、オオバロニアが他地点よりも多い。スズカケモがあり。ホンダワラ類の一種が多い。そこを過ぎるとウンパナリまで枝サンゴの死骸の堆積くいきなので体重をかけると足先が沈んでしまうで大変危険、かつ植物は石灰藻以外は皆無。

岬を回って北側は汀線から5mで枯死した枝サンゴの堆積がひどくて植生がゼロに近く、足が50cmも沈んで擦り傷を負う危険で歩け（進め）ず。実際、一度とうとう傷を負った。礁縁まで近いのでいたが、きわめて透明（石垣と西表中で最高）。礁縁に近くなつてサボテングサが2、3個体集まった群落が現れたのみであり、他の種は皆無。

船頭に領収書を最後（明日か）に毎日ごとに別々にくれという。カタメンキンサイは文献どおり、サンゴに皮状に石灰藻やイワノカワが貼り付いたところに貼り付いた状態で見分けにくい状態のものが汀線から10m沖に、また、礁縁に近づくにつれて礁面一面に黄緑色で広がるが、トゲキンサイかもしれぬ。⇒後日の同定で確かめるべし。

石灰藻はすべてのサンゴ死骸上にあり⇒この枯死サンゴ地帯は石灰藻優先地帯である。

4月3日（土曜）干潮15…11、雨+風でも強行出港した。外離島の外側の左に着岸した。12月と同じ浜。近いから300円x2でどうか交渉す。

潮流はほとんど無し。地図上の礁の幅を調べておかざりしたため、500mくらいで不安になり、かつ植生が変化無くなったこともあ

り、終了させた。

3cmフデノホと少し沖で大型のウミウチワ類の群落とホンダワラ類の種類とが、多いのが特徴。海草の密生している中に海藻があるのは手前100m。

マガタマモが見つからず。その親類のような棍棒が密生したものを取ったので種の同定が楽しみなり。

緑藻＋褐藻＋紅藻が程よく混在しており、かつ遠浅なので採集が楽で楽しい（晴れならば。）

水温は体温くらいなので温かいとは言えず、岬の先端に汀を歩いて行ったら風呂くらいの温かさに変化した。次回は先端のすぐ手前から入水することにする。

明日はウビラ石へ行くつもり。料金聞かず⇒明日直接1・2万払うことにする。しかし数日は風が出るので西の外海へは出られず不能といわれた。

内・外離島の間の西側およびサバ先の根元も外離同様に多いとのこと。

4月4日（日曜）、15・54干潮、星砂の浜（前に岩脈がある、正式名称は干立かどうか調べよ。）

4月4日、15・54干潮、バス15・05⇒15・23着、帰りは1747⇒18・??

浜の前の岩脈を越えて礁縁まで500m。

右に500mの西崎は礁の幅が700mあるので時間があれば行き、礁縁の外も調べる。

植生はきわめて貧弱であり、ゼロに近い。冷害は石灰藻であり、枝分かれするも節が無いので有節かどうか不明な個体が多い（岩脈間から沖へ）…礁縁まで同じ状況。オオバロニア1個が袋から浮いて流れ去ったかも。

4月5日、16・38⇒バス15・05、\350x2

海草が手前200mに多く、とくにウミマツバ類がアマモ類と半々なのが特徴的。それからホンダワラ類類がおきに向かって優占するが他の海藻はほとんどなし。

「波止場食堂」の平良さんの家を訪ねて話を聴いたら、今の季節は海藻はこの辺には無く、5月に多いとのこと。繁茂期は3月との定説は琉球では当てはまらぬか。鳩離島にオキナワモヅクが多く、一日ぐるぐる回ってくれて5千円とのこと。5月に船を出してもらうことを約束した。西表の東側は仲間川からの泥によるヘドロ地帯。西は海が深いので裏内川が運んだヘドロがサンゴ礁に溜まらずとの説明に納得す。

4月6日、17..25、西表の高那、\720x2、帰りはバスの時刻が良くないのでヒッチハイクの予定。

礁縁まで1kmを超えるところで採集した。バス停直下のところは干潟であり、海藻の植生は貧弱。手前300mは種子植物のかなりな群落。

帰りのヒッチハイクはすぐに見つかった。運転者は人間が多いところが嫌いであって西表交通に就職した、もぐりが趣味の人。

4月7日、南風見、また豊原の人に船を持っているか尋ねて越良浜^{くいら}へ行ってもらうか。ここは潮差が1mあるので満潮のほうが海中で採集しやすい。1缶一箇所になるので会とサンゴとを多量に取る。

大型のカサノリが岩脈との中間部からアマモ類上に多数群生するのが特徴的。胞子の放出後に傘が無くなって茎のみが残っている固体が多数あり。岩から半分よりも手前側のサンゴ片上で。沖のアマモ上には完全な傘付き個体である⇒群落の中で成熟度に大きな差がある。

岩の近くでは大型のフクロノリ。以前からの特徴であるテングノハウチワは変わらず全幅で見られる。

4月8日、飛行機の切符に指定日なので石垣に戻って那覇へ移動すべき日。

4月9日、沖縄島の瀬タケ（山冠に高という字）で辺野古近辺の観察。

1999年

5月25日、羽田で石垣行きに乗る。

5月26日、石垣市内で調査用の物品を購入す。

5月27日、富崎（観音崎）の南北側で採集した。

5月28日、白保の1km北側（盛山か）で採集した。

前の場所に比べてずいぶん海中の様子が違う。1m高の灯標に向かって砂地が続く、陸地に近い場所は海草が多く、海藻は少なし。

ヤガラのような吻の長い、全体が透明な1m長、幅5cmの魚が私の前で少し止まってからゆっくり泳いで行った。

5月29日、御神崎～屋良部崎の間、ポートホテルの主人に自家用車で連れて行ってもらった。

5月30日、川平の平離島

川平のバス停から徒歩でちょうど1時間で平離島の前の磯に崖を降りて着いた。左の砂浜はPadinaが密生し、ホンダワラ類類が混生。島との間はGalaxauraとソデガラミばかり。礁縁近くの深い裂け目は暗くて気持ち悪いが、意を決して潜ったらいろいろな種類が生えていた。石灰藻が極めて多し…有節無節サンゴもともに多し。Caulerpaをはじめて見ゆ。

5月30日、平野・マクリを多量に取って干して外人にすぐ送ってやる。

半島の東岸が本命；浦崎と石崎との間で放牧場内の道が浜へ出ている。その道の前の海は太いエダサンゴが厚く積もっていて、西表の網取よりも著しくて全く歩けず。ラッパホンダワラ類が密生す。胸のポケットからめがね（陸上用）を滑り落としたので30分ほど探しまくったが見つからぬため、あきらめてバス運転手から聞いた、明石までの7kmを浜伝いに歩く人がおるとのことなので100m歩いてみたら砂地で海草が密生していてよくないなと思いきや、やえやま中で最多の種数を見た。Caulerpaの球形で小粒の小型のが新種か新産種のはず。汀線から30m沖までの干潮時に10—30cm深でこのような種が成育するとはすごい。砂地上の適度なハマサンゴ型の円形の台のようなものが多数散在しており、そのへりに多種類が生育す。ホンダワラ類も多量なり。大型のタカラガイを二つも取った。人が行かぬ海域にはまだ大型種が残っているということなり。

センナリヅタの変形のCaulerpa..

6月1日、久宇良、\1000x2

水が冷たい、山から地下水が出ているかも。干潮でも汀線前5mで1.5m、10m沖で2mのそれぞれ深さがある。マクリが多し。

6月1日、平久保、\1100x2、帰りは1800ごろ

種類が豊か。砂地上に岩盤のかなり広いのが広がり、トゲキリンサイが全面にマット状に覆い、その中（間）に他の種がはさまって成育している。しかし、その岩盤上よりも側面のほうが種類が多い（直射日光を避けるための分布と思われる。）

100mくらい沖から枝サンゴ帯になるが、少し右のほうに行くと海草も結構生育す。土地の兄ちゃんと浜で話したところでは、右

は川が流入しているので種類が多いとのこと⇒島の東側に種が多いのもその説で可能。平野の東は浜への出口の北と南とに推量が多い川が流れ込んでいるとのこと。

バスが来そうな太陽の傾きに成ったが北側も少し寄ろうとしたら意外にも汀線付近の岩塊に *Caulerpa* が多種有り、例の新種来旨 鋤物以外にもヘライワツタ（？、縁辺に鋸歯あり）とタカノハツタがあり。

この淡水流入原因説の真の意味は陸上の養分運搬効果ではないか（奄美大島でも東に川が多いか調べよ。）今後、この説に従って橋のそばから海に入ることにする。

帰りに浜で網の繕いをする真の海人がおった。先におしゃべりした兄ちゃんが言うとした例の人かも、八重山の港の脇の漁港以外での浜での網の繕いははじめて見た。

6月3日、宮良

宮良西バス停で降りてその10 m先を下って藪をかき分けて浜に出た。まん前は深く、干潮でも足が付かぬゆえ2 m弱はあるべく、種数は少なし。左に20 m泳ぐと浅くなり、種類も多くなる。赤土の堆積がひどく、湾内全域にわたる。矮小な種や個体が泥に埋もれているので単に上から眺めただけでは海藻を見つけられず。あてども無く手のひらで水をあおって泥をのけるとはじめて小型種があらば運よく現れることと成る。

5—10 m高さのハネモがマクリとヤバネホンダワラ類上に着生していた。後でわかるように、それぞれの宿主は着生枝をちぎって採集したので、そういうのには注意せよ。

タカノハツタが群生していた。マツト上に岩盤を覆う種が切れ目無く左方の浅い区域にあり（ムラサキコケイバラかミドリゲかあるいは混在か）。アナアオサとボタンアオサが多し；礁原上の漸深帯にも多い。

偶然その日の新聞に佐伯信雄氏がアカツチネットワークを作った

と載っていた。

6月4日、16…40干潮、崎枝、湾奥から礁縁まで完全にやれ。

干潮の4h前からはじめたら最適であった。カタメンキンサイおよびトゲキンサイがよく成長し、直径50cmになっているものもあって岩と間違ったほどであった。カサノリ類は皆無。両側の岬よりも100m沖でようやく少し深くなって50cm深あり。様子は均一なのでここで中止したが、礁縁まではまだ500m以上ある。下水口が湾奥にあるので川と同様に栄養が流入して植生が豊富となっている。しかし台風の上陸の前日で風が強いせいか、泥を全面に被っており、小型の種は見えにくい。赤土の影響は不明だが水中を横に見ても大丈夫。

6月6日、野底崎、干潮17…30、1030発伊原間線⇒1115着、帰りは1615か1915くらいの一週線で、¥920x2。岬のそばから浜への出口（下多良間）周辺までやった。種数と生育量の多さに驚いた。隙間無く豊富に生育。5時間潜った。

例のCaulerpa新種らしいのを数箇所岩の側面で見つけた。直立枝の最大のものが得られた。他のCaulerpaでヘライワヅタの直立枝の低く円に近い楕円で縁辺が波打つもの（よく見ず）を入手した。

EuchemaとGracilariaとの太いもの多種密生している。マクリも密生している。浜への入り口（出口）の前から仕掛けてある刺し網ではホンダワラ類が多い。

6月6日、真栄里

台風3号の余波が残っているのに本番の昨日よりも波が高かった。しかし、水はにこっておらず。打ち揚げ個体が多量に有り。沖の小岩の半分で引き返した。

新種Caulerpaの大きいものが取れた。オオバロニアやマ

クリが多い。

6月7日、伊原間、＼1050x2、16・30開始。

マクリガ密生。カタメンキンサイが相当多い；オオバロニアも多い。いずれも汀線直前3mからすでに密生状態である。しかし、泥が3月と同じくひどい状態であって手で払いのけぬと岩か海藻かわからず。緑藻で線状の叉状(?)分枝で分枝位置間の距離が大で、根が不明瞭(最末小枝と根近くの軸との直径がほぼ同じ)で、rigidな個体がこの地点と月にはじめて生じていた。

例のCaulerpaの新種らしき桑の実状の個体があここでも取れた。

6月8日、野原崎Ⅱ星野、干潮08・30、＼620x2

浜への道はバス停のほとんどま前。道に入ってすぐに右に曲がる。そのまま海岸に並行に長く歩くのでこの道で正しいかどうか不安になるほどの距離。しかし道は自動車を通れる幅がある。

浜の中央の横長の岩付近から遠くの縦長岩までを調査することが赤土を避けるのに良く、また種類も多い。深さは干潮の3時間前から始めて汀線から行なってからで5mくらい。共同売店の人の話では地元民は中央岩以遠には行かぬとのことである。

オオバロニア、ホンダワラ類、モツレモル、ソデガラミ類、カイメンソウが多い。Caulerpaは少なし。

キツネノヲの若い固体が群落を作っており、その色はほとんど白に近い灰緑色。他の藻類に着生して髪の毛状に密生する灰紫色の個体と黒に近い暗緑色の個体がある。

ホンダワラ類の種類は海中では多数個体の密生で不明なのでこの類をやっている京都大学の男を誘うべし。ホンダワラ類の種類と個体数とがなぜこの場所にだけ多いのか、とくに分化したのかが面白い。

ヤハズグサらしい大型で多分岐の個体が沖の岩近くになると群生

す。

上りのバス停の位置は100mくらい市街地よりの星野共同売店の前にあり。

6月9日、名蔵（バス停はフーネ）、干潮09・40、\390x2カゴメノリとマクリとが密生す。とくに前者は3x3mが全面となる例が多く場所にある。マクリには毛髪のように叢生した緑藻と紫色のとが着生す。多種もマクリと同様に着生する個体有り。

ほとんど死んだものからなるサンゴ帯に近づくにつれてホンダワラ類が密生し、その種類は4種くらい。

カサノリは激減している。ほとんど見ぬも、あれば一点から群生す。

オキナワモヅクは3月と同程度の量。^{いらい}ウチワサボテングサが無く、海藻が多し。アミモヨウ？が群生した死んだサンゴ塊が三つあった。

6月10日、西表への移動日

港の前のみはらし旅館に電話するも出ず。直接行ったらそのころには戻っているであろうと思っただけにあらさならず。送迎マイクロバスから降りるときに運転手に3日くらい居らんようだと言われた。そのとおりであって、困った。結局下に10m下りた乗船券売り場の公衆電話でみどり荘に電話したら晩飯はやつとらんとのこと。しかし、閉館しとる旅館の前におっても仕方がないので、とりあえずみどり荘に迎えに来てもらった。着いてから婆さんに晩飯を頼んでみたがいややと言われた。近くの民宿を紹介してもらって迎えに来る前に親父が帰ってきて、食堂で晩飯作って領収書は5500円で作ってやるとのこと。それをOKしてみどり荘に泊まることにした。女風呂に湯船があるから入れとのこと。Hostelerは皆無。部屋割りで、男の部屋は畳で西日が入るので拒否し、女部屋のベッド室にした。

ANAHOTELの前の海を私的堤防で囲った許可はどこから

もらったか調べよ。

「みはらし旅館」は奇妙なり。玄関の両扉を強く引っ張ったら開いてしまった。さすが西表または琉球のええかげんさ。固定扉側の床の穴への差し込み棒（錠）が浅くしか刺さつとらんだせい。しかも、玄関を入れて左に公衆電話があるが通じず（10円玉を入れても発信音がせず、カードでは戻ってきた）

6月11日、南風見崎、バス停はYHのある上原0828⇒大原0920⇒歩いて0950に浜に着いた、¥780x2。帰りのバスは1340、1650の2本のみ。

はじめて沖の岩礁の外へ出たら東からの潮流が強かった。岩の右から岸へは西からの流れが強いが、しかし、風浪か。風が強くて、干出岩上に立つとよろけそうな時がある。

フデノホとカサノリ類はほとんど無し、とくに大型の個体は皆無。モツレミルが沖へ行くほど多くなる。平たいミルをはじめて取った。柔らかい質のヤハズグサ「?」の一種が岩礁付近から沖に向かって多量と成る。ホンダワラ類も岩礁付近から沖に向かって多くなるが、ラッパなど4-5種のみ。オオバロニアは少なし。ナガバロニア?の群生を2箇所発見す。例の新種らしいCaulerpaがあり、また直立枝の気泡部分の付き方がそれに似るが、センナリヅタとの中間の寸法であった。Avinvilliaハウチワ属の若い個体と思われる、石灰を全く被らぬ暗緑色の個体（数個叢生）を得た。

6月12日、西表の船浮、上原1020⇒白浜1043⇒備船で1055、350x2⇒700。帰り..船浮で迎える船1710、410x2、帰りのバスは無し⇒船の送迎バスの時刻を調べよ。

イダの浜から岬を巡って部落東端の消波ブロックの内側の川の後堤防の階段まで約1230-1430で完了⇒時間が余りすぎた

ので再び山越えして採集したら上がった時刻が出港時刻である。

汀線の直前から毛髪状に無数に叢生する黒褐色の種類が多数生育す。このような毛髪状に生育し、かつ太さは数 μ mのものは他に赤紫や黒緑色などもあり。これらは3月に訪れたときには無かったはず。

記録すべき他の点は、LXのApp'tの「今年のWWF中間・・・」を見よ。

イダの浜では3月と違う点は無し。

はじめて岬を外海側から巡って港まで採集したところ、ホンダワラ類(3-4種)が密生し、ウスユキウチワ?も多し。紅藻はほとんど無し。ただし岬の先端で分枝多数の大型アケボノモヅクがちらほらあり(しかし、山からの地下水が湧き出る海中泉が多いので冷たいにもかかわらずこの種が生えているのは奇妙)

6月12日、西表の上原、干潮13:10

海草帯が堤防の端の西の前に広い幅でかなり沖まで広がり、サンゴ岩塊はほとんど無し。50mくらいまでサンゴ帯となり、植生がなくなる。緑藻は事実上無く、ホンダワラ類が優占している。しかし、海岸区域の西はサンゴ岩塊がかなりあり、緑藻もかなり生育す。青紫の毛髪状叢生している種類があり、イダの浜のものと同じか。

★今回は、去年(1998)の12月の西表での話しの続きです。
はじめに、2回目に出てきた商店と機関との電話をあげておきます。

琉球大学熱帯生物圏研究センター西表実験所 098081516
5650

東海大学海洋研究所西表分室 098081516176
ヤマト商会 098081212011

さて船浮部落へは定期船の運賃は数百円で、安いのも生活便であるからですが、乗客が我々二人以外には無いので、現地の人口が推し量れますね。実は50人くらいなのです。船賃が安いのは役場が補助しているのです。戻ったときに切符売場の人にこんなに客がいなくて暇でしょうといったら、監査で忙しいといっておりましたので、図らずも補助の件が証明されました。

航行中は切符売場の人から船浮湾は摺り鉢状に数百メートル落ち込んでいる、大型船の国際避難港であって、昔は部落の明かりよりも避難してきた船の明かりの方が多かった時もあると聞いていたので、海面に注意したところ、白浜の港の前面ですでに色が深い水深を示しておりました。航行中も、途中に浅瀬が有りますが、ほとんどが深い色でした。船を係留するブイが5個くらい浮いております。

船浮部落の船着き場は立派なコンクリート製で面積が結構広く、離島振興法その他の法律による補助金でできているでしょう。しかし人がおりません。目の前がすぐ部落であり、左右に道が通っておりますが、しかし、我々は人に会いに行ったのではないので、岬の反対側へ出なければなりません。山越えというわけです。ハブはどうかですが、先島でのハブは毒が弱いので気にする必要はありませんし、その峠越えの山道はそれほど左右から密林が倒れかかってくるほどではなく、道がはっきり見えておりますので、ハブが横たわっておれば見える明るさでした。20分ほどで反対側の浜に出ます。

この日は天気があまり良くなかった。潜って採集している最中に雨が二回降ったし、2時間経って上がった直後に相当強い雨が降ってきて、半袖下着ではさすがに震えました。浜のアダンのくねった枝

をかき分けて奥に入って雨宿りとなりましたが、10分くらいの長かったこと。空腹感が募ってきたので、滴が回りでしたたる中でパンをかじったという惨めな経験はこの1回だけでした。これからわかることは、琉球の冬は雨が結構多いと言うことです。15年くらい前に年末年始を突き抜けて石垣に採集で滞在したときは毎日日中にならず1回はしとしと雨が降りました。雨がやんだらこの地域の事ですから晴天です。

しかし船の出港が5時台ですから時間潰しをしなければなりません。まず浜でゴミ拾いをしました。貝殻と珊瑚の破片を土産にしようというわけです。無料の土産ですね。かなり多くを拾いました。帰りに、戻る道の入口内部が広く踏み均されておりましたので、陸上植物の観察を少ししたところ、ヤシ（ヤエヤマヤシ）が枯れて高さ1.5mの所で折れているのを見たので、少しほぐしてみました。中心（植物解剖学では髓というはずであるが、形態が区別できずに中心まで同じ構造なので中心というしかありません）まで直径1mほどの繊維がぎっしり詰まっているのに感動しました。ぎっしりとは言っても、枯れたせいかどうかはわからぬが、緊密に詰まってはならず、ふかふかの状態でした。台風でも倒れない構造は長い繊維の束であるからなのです。

おっと書き忘れるところでしたが、浜の右の行き止まり点で海岸林を少し分け入ったら大昔の墓があり。その横の大きい木の途中の枝には類人猿観察用のような小屋が設営してあったのには気味が悪かった。墓の前には酒瓶が10本ほど散乱していたので、墓参りをするのであるうか。八重山諸島すべてに共通する悲劇として有名な、マラリアによる開拓部落全滅の一頁なのであるうかと考えを巡らせてしまうことであった。今回は時間が無いのでこれで「次回は船浮部落そのものについて」

今回も西表の船浮部落の話の続きです。

岬の反対側での採集を終えてから部落に戻る途中には石炭紀に地球を覆って繁栄した木生シダの生き残りであるヤエヤマヘゴ（サキシマヘゴ？）が多数はえており、八重山地方の特徴が強く出ております。

海側から見て船浮部落の左側には真珠養殖場の処理場があり、女性達が養殖用の垂下カゴの掃除をしておりました。現場責任者と話しをしたら、黒真珠の養殖の初期の段階を受け持っており、ある程度育ったら本格的な養殖のために他の八重山の養殖場に移すとのことでした。

どういうわけか乗用車の壊れたのが宅地の空き地に錆付いて放置されておりました。走らせるにたる幅の道が無いのでこういう事が不思議です。

右にしばらく行くと宅地の片隅にイリオモテヤマネコ発見の場所を示す標柱が立っていて驚きました。船浮き部落のような人が少ないところで発見されたとは。さらに右に行くと行き止まりが船浮小学校中学校です。人口が35人とかいわれるのに学童がいるのでしょうか。おりました。出港待ちの時間潰しの間に下校時間が来て、小学生、それも二人組みがやって来たではありませんか。その学校の建物は本土の普通のものに遜色ありません。その上、校門の内側に校内の植物分布の季節変化を示す多色塗りの立派な説明板が立っていたことにはさすが日本、標準化一般教育の威力がこのような僻地にも現れておりますね。その上、校庭のトラックが芝生で覆われておりました。立派なものです。しかし、人間がおりません。農地らしい場所は見えませんが、漁業で生計を立てているはずですので、昼間が船で沖に出ておるのでしょうか。

白浜に戻ったときに船浮海運の事務所の2階にある、夏に二度利用して情報を得たた軽食喫茶店シェルでゴーヤーチャンプルを食べようとしたら、階段の入り口に錠がかかっておりました。先日也是如此でありましたし、この店の女主人である地元出身の團ヒロ（苗字の場合は「団」と書くとその人に失礼ですから気を付けましょうね）さんはたしか武蔵村山近辺が現住所ですから、夏しか営業せぬのでしょうかね。

宿舎への帰り道の途中の星砂の浜への入り口の道路際の軽食喫茶店もすべて休業中でした。というわけで、帰りの時刻が45分づつ毎日遅くせざるを得ぬ海中採集の場合には宿舎の食事時刻に間に合わないので予約することができず、確実な食事または餌は、上原の「川満スーパ―」で石垣から毎日運んでくる弁当を一日分まとめ買いしておくのが安全である。ただし、毎日10個しか仕入れぬことを心しておくべし。西表ではいかなる種類の店でも夏以外は直ちに冬眠に入る傾向があるようです。上原の西側の外れの食堂「たまご」は恐らくやっているとありますが、費用の点で利用しませんでしたのではつきりしません。この店は本土風のメニューの店として「沖縄離島ガイドブック」（題名は怪しい）細かい情報が多いので、琉球列島の人口が少ない島を訪れる人には最近必須本となっている雑誌であり、本土の大都会の大型本屋にも置いてあります。）なお、東海大学の実験所では12月はじめから3月末までは食事を提供してもらえませんが、琉球大学の実験所の方がまだましではあります。この差はresident staffの数の差から来ているのでしょうかね。

星砂の浜への入り口の土産ものの屋は営業しておりました。相棒が浜ですくってきた星砂（有孔虫の骨格）を入れる空瓶をその店で買おうとしている間に私はその表で休憩していた道路工事人夫と世間話をしたがる、その際、「本土復帰したが雪だけは来なかった」と言っ

たことに感銘を受けました。世界的にも熱帯の人が雪に寄せる関心は相当なものがあるようです。

星砂の浜の近くに海岸自然保護地区というような道路標識が出ておりましたので寄ってみましたけれども、自動車で浜に直進して堤防で行き止まりになったところの周辺には解説板が立っておらず、また目で見ても何が保護されているのかわからずじまい。行政の鈍感さの一例です。

研修の義務を果たす前々日に採集から帰ったときに琉球大学の宿舎の玄関の扉の支点側に右手の中指の爪の根元を挟んで骨折するとうう、生まれてはじめての骨折の経験をしてしまいました。出血が相当あったのですが、傷口が見えません。痛みにうめきながら事務所に行って事務官に自動車で西部診療所に運んでもらいました。健康保健証を持って行ってあったことが幸いでした。X一線撮影をしたところ「折れてますね」と事もなく宣言されてしまい、もし直らなければ採集ができず、研究ができぬことになるのでこれはえらいことになったと絶望に打ちひしがれました。石垣に帰って県立八重山病院で再びX一線撮影しましたが、画像の鮮明さが違ったので、やはり西表とは違うとの感慨を催しました。ひょっとすると西表では電圧が低いのかな。結果は、きれいに折れているので何もせずとも一月で治るとのことでありましたので、拍子抜けしました。二ヶ月経ちましたが、中指の先端を付き当てることのある作業は、中指の爪の先端が垂直に当たっただけで爪の根元がズキンと来るので恐くてできずにあります。爪が生え変わらぬと安心できません。この項をHP掲載用に書いた時点では酸化ヘモグロビンの真っ黒な塊が爪の裏側前面に未だに貼りついております。

最後の日は風、すなわち波、が強かったので陸上自然観察をするのにしました。ヤマネコ保護観察センターが東海岸の中程にあるの

で、寄ったが、東京都の高尾山自然観察ビクターセンターの水準のものであって、パネルは結構数がありました。面白かったのは、西表での天然記念物関係の動物をみかけたら西表の絵地図の中のその場所に磁鉄粉を塗った軟塩ビの20 X 70mmほどの白板に動物名とdateと観察者名とをマジックで書いて貼付けるようになってのこと。早速最初の日には南風見田の直前の道路上で見たセマルハコガメの観察dataを貼付けておきました。

本土復帰前には南東の角の大原の仲間川には米軍のジャングル戦闘訓練用の巨大な立体式鉄橋がかかっており、地元の人が対岸の部落に行くのに利用できて感謝されておりました。冒険好きな人にはそんな橋の方がわくわくするのでしょうか、現在は当然普通の舗装道路の橋になっております。八重山でマラリアが撲滅されたのも米軍の消毒のおかげとなっております。石垣島の一周道路も米軍が作ったのです・・・琉球民政府時代にはOgden Roadという名前でした。

石垣に戻る日にレンタカーを返しましたが、事務所が港のすぐ前にあるのに、岸壁で乗り捨てしたら1700円くらいとられたことが後で明細書を点検してわかりました。石垣行きのフェリーには西表の北岸の上原中学校からの修学旅行生と乗り合わせたので、行き先を尋ねたら、九州とのことでした。中学校はやはり近くに行くのですね。

石垣に戻ってから、帰京前日に原稿を送るために石垣港前の石垣グランドホテル前の公衆電話（いわゆるグレ電）でNIFTYに接続しようとしたら電話番号の下3桁が送られません。何をやっても解決できません。そうこうする内にnote PCの弱点である電池が切れてしまい、その日は終わり。家に帰ってから宿屋の同宿者の学生に相談したら、上記の離島情報に八重山毎日新聞社内でint

ernet cafeをやっていると書いてあると教えてくれたので、翌日早朝宿直らしい人が中で動いていたので、cafeの係りが10時にならんと出勤して来ないので言うことで断られたが、飛行機が10時なのでと無理を言って入らせてもらい、勝手に接続してやろうとしたが画面からどこを搜してもemailのmenuがありません。そうこうするうちに9時になってしまった。焦る。もうあかんか、と観念した時に係の女性が早めに出勤してきて助かりました。実はそのPCではWEBだけやれるようにしてあったのです。他人のPCで緊急な処理をしようとすることは危険であるということが教訓です。その上emailは(営業としては)やっておらぬといって利用料金500円を受取りませんでした。電話代は画面に30円と出たので、その分もサービスしてもらったことになります。さすが南方ですね、太っ腹。そのような窮地に陥った時の最後がこうなるとemail送信がうまく行ったことと合わせて気分が収まります。

琉球海域の海洋植物の調査をしている我々、熱帯海洋生物環境保全研究会のweb siteのURLはHttp://www.marinebiol.org/です。しかし、学名の記入が面倒なのでひどくunder constructionです。学名(採集記録)の打ちこみは、30年前の第1回の分を終えただけです。その他の情報は未入力。掲載した地図は著作権違反かどうか問い合わせる必要があるがサボっている。

12/ March - 22/ Aprには今年の第1回の西表、石垣、沖縄の各島に採集に行きますので、この続きは現地で書いて送ることになります。それでは。

石垣市の通りの標識には中国語が併記してある

安い宿の電話のリスト

外離島^{ソトバナリ}への雨の中を強行出港でひどい目に。

2000年4月20日

波照間島の西浜の西の症状の大きい干出岩がある2箇所で採集した。カメラのロックが解除できずに撮影不可能となった。

両地点ともに種数多し。海草藻場もかなり発達す。500m沖サンゴ帯の終わりまで調査した。潮流は西向きの2ktであり、干潮3h前に潜ったら流されて危険を感じた。

例の幽霊のような紅藻の種がサンゴ帯で出現した。⇒大型の紅藻はこの種のみ？（オゴノリやイバラノリなどの蔓性の種を除けば）モツレミル？の大きい塊が多数アリ。

ホンダワラ類は皆無。褐藻はPadina類がごく少数あっただけ。

4月21日、黒島

海中公園センターを置いてあるだけのことはあり、種数が豊かであって、かつ量も多く、干出幅が300mくらい。その先は海底がサンゴ砂で適度な間隔で直径50cm平均の岩が散在し、その上面も非常に密な植生あり。かつ海草も少量ながら散在す。ホンダワラ類類が豊富。オゴノリ、カギノリ、イバラノリ類の種類が多い。港の船客待合所は内部施設は便所だけであって売店も食堂も案内地図も無し。50mまっすぐ行って曲がってレンタサイクル店の10m向こうの個人宅が＊＊商店であり、インスタントラーメンx2とソーページで昼飯とす（450円）。

春は500mまで干出し、平坦なので生態の区画調査に適す。

4月22日、小浜島、弁当を買っていくほうが良いとの真珠養殖上の女の話。ウエスト・ポーチ内の小銭を入れたつちに砂を詰めて浮力を打ち消すべし。宿のFAX用の線を抜いてnote mode mをつないだ。3年前に始めてきた埼玉の女がここで知り合って熱々恋愛中の夫と1月前から住んでいて、夫は土地を借りてキビ農業をやっていて妻は観光案内所（協開いたばかり）をやっておる。

港の左の、沖に岩礁が突出する位置にミル、オキナワモヅク、イバラノリ類が多し。オオバロニアの大型の個体かなりある。海草も散在す。岩に近づくとき海藻（ホンダワラ類が多く、ヤハズグサ？の大きな群落が多し）が多く、水温は低し。

大型カサノリが1個体のみあり（季節はずれ）。
大型タカラガイを岩の間で取った。

4月23日、竹富島、沖に向かって左の岩島前

Padinaとホンダワラ類が岩島に近づくほど多し・・・水温が低いとそのせいか。

礁原では10mくらいの干出する岩盤にコナハダ類が密生。

オキナワモヅクとイバラノリ？が多し。

岩島手前の湾入した小さな入り江にはPadinaの純群落が多量と成っている。

岩島手前には海草の藻場となっている。

教訓…打ち上げ種数と量が多いところでは岩島の目印無くとも潜るべし↑今回は岩場／島は少量であったので。

地点の写真を取り忘れたか⇒海底電線揚陸地点票の前 港のterminalには何も売っておらなので弁当とお茶とを石垣で仕入れて行くべし。

4月25日、盛山⇨去年の白保北⇨牧場を横切る⇨轟川よりはずつ

と南と思う。

ミドリゲ的なマットが汀線近く数m付近に厚く覆い、はがすとマガタマモの巨大個体の叢が多数散在す⇒この指標種となる。

サンゴ帯を超えた外の礁縁にはセンナリヅタが密生していることが興味深い（沖縄島の北東でも同じ場所なので荒い波と酸素が多い水が好きと思える）。

汀線近くの浅いところの小岩盤上に紅藻のマユハキ状の珍しいものがある。

イノーの海底のサンゴ砂上にはほとんど植生が無い。ヒロハサボテングサさえも無いのが不思議。

礁縁付近にヨゴレコナハダ的な、ネズミタケ（キノコ）状の枝端が白っぽい石灰入り紅藻が点在す。

汀線近くのガン万丈にホンダワラ類が数種、個体数は多し。

ソデガラミの巨大塊が普遍的に多数アリ；礁縁に近づくにつれて増えるⅡ優占種となる。

図を入れよ

4月26日、吉原

種類が豊富であるの一言なり。100m沖のサンゴ帯では生きた枝サンゴが多し。石灰藻也多し。

八重山毎日新聞に投書する…バスの再後部座席の背中落書きのひどさと握りのカバーはずしと背板のネジはずしと枕の別珍の引っかけ落書きは田舎の児童生徒の仕業とは思えぬひどさなのでどういうことは不思議である。??小との署名が落書きにあったので小学生の仕業か。中高生もやっているのか。とにかく大都会の不良生徒のような行為が何回ののんびりした土地柄の子供たちの間に存在することが不思議である。

2009年9月4日、大崎（牧場の下へ降りた）、崎枝までバスで行ってから歩いた。道順の地図を入れよ…行きに便乗させてくれた電気の検診員に書いてもらったもの。帰りは30分近く歩いたら後ろから来た車を振り返った後で行き過ぎて止まったのでこれとは思って走っていった便乗を頼んだらOKであり、交差点まで遠回りして乗せてくれたので助かった。行きのバス停は崎枝ではだいぶ戻ることになるので坂の上がり口で頼んで？そしてもらうべし。（大崎への道の分岐点で）。往復ともに車を拾えて幸運であった。

イワツタ類が4種くらい、個体数は多い。

ホンダワラ類とウモウチワ類も多し。

まあまあなのはHalimeda、フデノホ、ヒメイチヨウ、ミツタマ。マガタマモかあるいはナガミズタマが少し。

100m沖で死んだサンゴ骨片が散在するサンゴ砂底+サンゴ塊が散在し、海底に近づくとき泉が湧いていて急に冷たくなる。

水深は完全に一定であるが、100m沖で急に1mとなるも水深はそれ以上は一定。

種数は多いとは言えぬが個体数は豊富であり、サンゴ帯まではアマモ類の藻場を含めて海底ほぼ全面海藻で覆われる。しかし細かな砂（泥）が多く、海藻を採集するととたんに濁る。

2009年9月5日、安良

採集袋の中に入れた場所札に間違って明石と書いたので注意せよ。極貧であってサンゴ砂の細かな粉が積もって汚く、種数も個体数も極めて少ない。

目立つ種はオオバロニアの4cm直径個体のみ。

ヒロハサボテングサが散在。

陸上に畑がないのに泥を被っているとはどうしてか… 30m沖で右（南方向の流れが強い、大岩の近く）

二回目の地点は種子植物の藻場。白いサンゴ砂、植生の極貧は不変。オニダルマオコゼに出会った。胸鰭は、体が海底に付いていると

きは畳む。図を入れる。はじめの採集地点で大岩の左にアンコウ状の上側に円弧状の大口を持つアカグツの形の30cm長、25cm幅の大魚があり、背は緑色のコケが生える。ナイフを魚の口に差し込んで持ち上げようとしたら硬い筋肉で刺さらず、また痛みが無いらしくて1m脇に退いてから再び海底に着地した。

帰る際に釣り人の車に乗せてもらうことになったが、私が着替えせぬことに文句を言われた。軽貨物でもさびることを気にする労働者風情のものもおることがわかった。その岸から県道までは車が通った轍のあとはあるが、大岩がごろごろ転がっており、彼側の裂け目があり、2本の川を横切り、という、完全なジャングル探検気分であった。と、まあ無事帰れるかどうかの大不安は解消されてめでたしめでたしとなったが、収穫は極貧であった。採集地点が不明だが、後で地図を見ると岸の岩礁の分布から判断して安良付近に間違いなし。

昨日石垣のバスターミナルで出会った水産大学校3年生の後藤君にまたターミナルで出会ったが、?????に行くといんのを止めさせて冒険に行こうと誘って同行させた。牧場の牛にまたもや道をふさがれて恐ろしい目にあったが、浜に出たら先回の牛の死体は消えていた。この死因は安良から便乗させてくれた地元民によれば暑さで死ぬとのこと。さて浜へ下ってから次の火山岩性の岩脈で2名釣りをしていたので安良までの所要時間を尋ねたら30分くらいと言ったが、これが大嘘のコンコンチキ。岩脈の小岬風地形を三つ越えて2時間たったが廃村の跡すらなく、仕方がないので弁当を食って休んだ。平野で彼に飲み物を買うように言ったにもかかわらず、私自身はというと、ターミナルで買ったのをバスの中で飲んでしまったことを忘れていたので半分もらった。うす曇であったので沖の海中は全く見えぬが、それでも彼は感激していた。浜の地形は火山岩脈、10cm径の礫地帯、砂浜、大粒砂利と4種。大体にして歩きにくく、歩くことが結構きつかった。彼に、私の足が速いですねといわれて気を良くした。彼の背が165cmくらいであるせいでは

ないか。3時間近くたったら岩礁で釣りや貝取りをしている夫婦がおり、崖の上に車があるので乗せてくれと頼んでOKをもらった。かえるまで30分くらい潜ってよいとかと言ってOKをもらったが、⇒続きの矢印があるがその先の文が不明

9月6日、明石、採集袋のplastic plateには明石（正）と書いて安良の間違い記載から区別せよ。

東岸が植生豊富であるとバスターミナルで聞いたが、今月は極貧植生であった。海底はサンゴ砂であり、濁りは無し。きれいな模様の魚が豊富（モンガラカワハギ、ムラサメなど）。

リゾート専門学校の教員である鹿児島大学出の少年が海亀の調査をしていた。泥棒よけに貴重品を預けた。その間の採集中にバッグを女二人組みに預かってもらった。その帰路に待ち合わせで別の場所に行つて2時間後に戻るまで海亀調査に同行した。金属の細い棒で地面を突き刺しながら歩くと亀の産卵場所は柔らかいのでわかるとのこと。2km歩いた。

バスターミナルで尋ねよ…昨日実施した岬は安良か、5…10平方野初のバスはここに何分止まるか。

伊原間発の港のバスターミナル行きの最終便は7…40

西岸は30cmくらい深さの泥底（伊原間湾からずっと）

あした玉取崎は潮流が少し早い。たいしたことは無いが、知らずにいると流される。バスの運転士の話では手釣りをゴムバンドの輪を作つて手首を通し、岩に引っ掛けながら進む。コンビニの上の釣り道具屋で買う。

八重山毎日にバスの座席の背中へのひどい落書きを投書せよ。

帰りは専門学校のマイクロバスで伊原間まで送ってもらえるはず。

9月7日、玉取崎

12…30に潜つたが、潮流が早いとの伝聞情報および浜の入り口のたて看板は大げさであった。流れが右向きに存在することがわ

かる程度なり。

しかし、どうしてこのように東岸は泥だらけなのか。サンゴ砂が粉になりやすいのか、要らざる農地改悪のせいかな。

モルが優占し、準優占種がアミジグサ。

その他の種はごくわずかにところどころにあるのみ。＊ヒロハサボテングサ、ガラガラ、ウスユキウチワ、Caulerpa 数種。

岬とその前の大岩との間と崖の周囲とを調べた。岩の右は少し種と量が増えるが、手前と左とはミル以外にウスユキウチワとヒロハがちらほらあるのみ。大岩の周りは魚の種類が多く、美しい種類を多数撮影した。

唯一の珍種は岩の茂木側の壁の海面下にへばりつくこれまで見たことが無い緑色の膜状のものが一面に広がれり。

運転手の鳩間さんはすべての放送を肉声ではっきりと「・・・でございます」とはつきり2回づつ言ったのでえらい。若い男性なので入社後間もないのかも知れぬ。

岬の手前1kmでゆっくり行って浜への入り口が有ったら止めてくれと頼んだ。展望台が見える角の手前の直線200mで道があり、OKであった。後で調べたら展望台入り口の標識の左への道から50m先。バスの乗客の爺さんに尋ねたらその口から岬⇨大岩の前まで300mくらいとのこと。荷物を置くのにちょうど良い崖の壁面のくぼみがあり。

帰りに幅が大きいシャコガイを拾った。このような大型のものはじめてなり⇒図鑑で名前を調べよ。

9月8日、船蔵

500m沖まで採集した。礁縁に白波が無く、奇妙⇒地図ではちようど500m幅のサンゴ礁

台風が近づいているせいで風が強く、沖に向かって少し波が立っていた。風のせいで力、半分の距離まで海中が濁っていて空中からは海中が見えず。

250 m沖の地点もそうであるが、潜ると海底上20 cmで見えるようになった。植生（個体数）は意外に豊富。藻場が発達し、3-4中の海草があり。はじめて見る幅が狭い海草種があった。

Caulerpa類が多い・タカノハヅタとその小型のキザモヅタが沖に多し。ヒメイチョウも多数が集まる傾向がある。ヒロハサボテングサとサボテングサとはそこその量。ホンダワラ類は3種ほど。Padinaは2種ほど。

歩いて陶芸工房の看板の裏、ミニゴルフ練習場がある。

濁っていても海中を歩くとヌルヌルせぬので赤土でない、サンゴ砂の粉と思われる。

遠浅であって礁裂もなく安全。

9月10日、浦底湾（大田）

台風襲来の翌日であるせいで濁っていて100 m

沖までは海中が全く見えず。そこ以遠は意外に多種類が生息す。復路にわかったことには沖に向かって左側が豊富である。

Caulerpa類が数種、ホンダワラ類類が数種、Padina数種、石灰藻数種、マクリが豊富。

藻場の構成種は5種ほどであって湾の中央まで広がる。

湾の両側の岬を結んだ線（枯死サンゴ堆積帯）まで採集した。

打ち上げの中に泉水採集では得られざりし種が数点あり⇒今後潜水を終えてから汀線を歩いて採集すべし。

Caulerpa類ではタカノハヅタが多くて目立つ。

9月11日、大野、11・15、帰り12・10、720円。

黒島出身の黒島さんの娘がちょうど港まで荷物を取りに行く四輪駆動車をhit ch hikedした。竹富をタケフと言った女がバス停前のゴルフ場を突っ切って行った。

さんご礁が狭くなったところは避けよ。

台風が直撃したにもかかわらず、暴風圏と雨が無い小型であったお

かげで礁上はほとんど影響無しであった。むしろ厚い雲が来たときのほうが問題であった。その上、幸運なことには、大変豊かな種数と生育量。書誌植物は4種は少なくともあった。藻場も（半分まで調査し250mくらい）豊かであって、その中に適度な大きさのサンゴ塊が多く散在す。

ウミマツバの大と小があった。

例の久宇良ではじめて見たCaulerpaの新種らしい個体の方々の岩塊の側面に本種にしてはかなり長く、匍匐枝10cm張っていた。Caulerpaの種は豊富であってタカノハヅタ、キザミヅタ、ならびにヨレヅタとその小型の別種と思えるような大小個体あり⇒分枝分類に使ったら面白そう。

オオバロニアがかなりあり。

カタメンキンサイが汀線近くから多数あり、むしろ100mまでのみ。最大は5cmくらいあり。

ホンダワラ類は種数少なく、個体数は多し。

岩以外の砂地（泥ではない）は基本的に藻場となっている。

Halimedaは3種。

ミルは2種。

マクリがかなりあるが、群落は作らず、せいぜい3個体が集まるくらい。しかし、巨大で根元から多数の幹が分かれて大きな叢となれり。

風が弱いので台風の影響かはわからねど、50m沖まで海中が見えぬ状態で濁っていた。100m沖で岩が多くなると濁りは少なくなるも岩の上は泥で5mmまで覆われ、一見植物があるのかわからぬほどであった。手で水流を払うと植物が現れた。ということは、岩の側面から下面にかけては泥は少ないのですぐ植物がわかる。動物はほとんどおらず（ガンガゼとヒトデ類とイソギンチャク類とsoft corals）、魚も非常に少なかった。ウニは200m沖ではじめてシラヒゲウニに似た白と灰色との線が入った種類の個体を二つ見たのみ。つまりここは藻類を含む植物の天下であるとい

える。

その上、台風のせい、人が全くおらず、浜への道はバス停の少し先の農家の倉庫（開放してある）の次の2軒目の家の手前のあぜ道（車のわだちがくつきりで草が道の中央にかなり残っていたのでハブが居るかも知れぬと思って気持ち悪かった。30mくらい歩く途中に農家がある。

9月12日。11・51、大里・バス560、帰りはヒッチハイクバス停の前の（有）三協コーラル南恩田鉦山の看板を道なりに（右に曲がる）行くと開けた浜への目の前の出口がある。

種数も個体数も大変豊か。300m沖くらいでサンゴ帯となる。海草の藻場が適度に発達し、その中に海藻も豊かにあり。

例の新種らしいCaulerpaが多い。

キツネノオが多いが、これまで群落を作っている例を見たことが無く、初めての場所である。

9月13日。12・21、盛山口・バス450+350

台風が襲来している暴風雨の最中に強行した。盛山バス停のゴルフ場を通って裏の藪をくぐってのU字溝を飛び越えたと路があり、右へ進み、二股となつているところを右へ行く。浜からの帰り道はゴルフ場の裏道を素直に戻れ。そうせずに舗装道路のうちの幅広い道を行ったら迷って往生した。

ホンダワラ類が多種かつ多数であることが特徴なり。海草から成る藻場が沖まで続く。

Caulerpaが岩だけに貼りついており、砂地には無く、例の新種らしい個体が泥に隠れて岩の溝と裏とに、匍匐枝が長く、直立枝も長く、立派な個体が多数成育している。他には小形のCaulerpaがが数種あり。

全体として白保の植生と似ており、そこそこの種数と個体数である。

暴風のため、礁縁までは行かず、半分の距離の500mくらいで止めたが、そこはサンゴ帯であって、巨大なハマサンゴがいくつかある。サンゴ砂からなる海底なので礁縁の干出部分のみ遣り残しただけとなり、あまり結果に影響せぬはず。

発表は一回の採集旅行ごとにNova Hedwigiaにする。

9月14日。船越の予定であったが台風で大雨なので中止した。

9月15日。船越、13・20、バス賃850円x?

ターミナルでバスを待っている時間中に前で店をしている中年女性と立ち話をした。その人の家は久宇良にあり、私が毎日11・15のバスに乗ってますねと話し掛けてきたので、海情報などを30分間話した。それによると、マクリは1kgが7000円で売れること、海藻は5月に多いことを知った⇒真栄里は足の踏み場が無くなったので穴があると怪我につながるので怖くて海に入らず。メジロを飼っており、一羽を籠に入れておいたら大勢が寄ってくるのでトリモチを棒に塗って立てておいたら20羽つかまったとのこと。違法なので逃がせと意見した。伝書鳩も飼っているとのことなので鳩の糞には人間の脳に寄生するカビが入っているので注意せよといったら逃がしても戻ってくると言っていた。

船付き場の右700mまで砂底なので台風の余波で濁っていた。そこ以北(右)からサンゴ礁が始まる。また、浜は火山岩のゴロタと大岩が数個有り。貝を取っていた地元的中年女性が数人。湾口のたんどづ小干出岩に向かって汀の岩場から斜め方向に調べた。

500m右で干出している砂浜にヒメイチヨウが密に固まって生えていたのは不思議。石の上ではなくて砂粒を綴った団塊のように見える⇒あとで詳しく観察すべし。打ち揚げ品は海草が僅かあるのみであった。

<サンゴ礁区域>

藻場が発達して500m沖まで湾口方向に続く。300mまで

はその中にH a l i m e d aとカイメンソウとが優占し、他にはイバラノリが散在す。しかし個体数はH a l i m e d aのほうがカイメンソウよりも遥かに多い。300 m以遠では少数ながらサンゴ塊が現れ、そこにはいろいろは種が成育していた。

沖縄島の辺野古と同じく、海底に打ち込んだ鉄棒（40 cmくらい）に周囲の海底（砂地なので当然ながら）とはまったく違ういろいろな種が着生しているのはなぜか。岩塊と同じなので不思議にあらず。他方、オオバロニアが同心円状に5、6個着生していた。

ホンダワラ類が3種くらい、タカノハヅタが豊富な岩があり。キツコウグサは普通の量。浜の岩場（干出している）の潮溜まりに立派なヤバネホンダワラ類がかなりあるのは面白い。汀の浅い場所が好きなのか。白保付近でも同じであった。浜のゴロタ火山岩の上にランソウモドキらしい緑藻があるが、サンゴ岩上にはまったく生えておらぬことが面白い。

帰りに行なう港周辺での予定は下記。

1. バス・ターミナルで鼻紙を4つ買う
2. 3-2045（宝生観光）に八重山毎日に載った土地売却広告で山林300坪300万円は地目を変えずに宅地に使うことは適法か尋ねる。

3. 2-3123（神山モータース）に中古自転車の値段を尋ねる。

4. 098-836-3295（仲井間チケット・サービス）辺土名への配達はできるか、空港内ではできるかを尋ねる；マイレージは加算できるか。

5. 潜水業者のトムソーヤで石西礁湖には行くかを尋ねる。

本業のついでに拾った貝は、クモガイを二つと逆の大文字T型の珍種。

岩の浅くて広い横穴に青色の太った魚が尾びれの根元から4 cmまでを外に出して隠れていたのでsea knifeで刺したが刺さらず、尾を持って引っ張り出そうとしたが渾身の力で引っ張っ

でも出せず。いったいどのような逆らい方をしているのは実に不思議なり。改めて海藻を採集し始めた瞬間に魚は逃げ出した。どうして攻撃を止めたことがわかったのかもまた不思議なり。

9月15日。伊土名、バス賃880x1

50 m沖までは濁っていた。500 m沖まで行ったが海底はすべて砂地であり、300 mくらいでサンゴ(砂)帯となる。それまでは藻場が発達している。とくに50 m沖までは密生している。

珍種のヘライワツタ？
を300 mくらい沖で見つけた。

灰緑色で面は滑らか

ホンダワラ類の個体数が多く、汀線近くから300 m沖まで継続して見られた。

カサノリ類は数個体しか見られず。

フデノホが群生する岩が数個有り。

イワツタ類は上述の場所にタカノハツタとフサイワツタが砂上と岩上に非常に多し。

打ち揚げでスズカケモを得たが、海中ではこれを見ず。

300 mくらい沖のサンゴ帯で有節石灰藻がかなり生育しているが、種数は3つくらいである。

動物では500 m沖の岩塊の棚の下にミノカサゴを見た。完全な貝殻のクモガイとT字形の貝の横無し?のものを採った。美しいチヨウチヨウウオが多いのでカメラを持って潜るべし。マダラウミヘビに出会った。

潜り店の基地として5人乗りの小形モーターボートが係留してあるが、うねりがあるにもかかわらず出港した。

うねりがかなりあり、潮流が速く、300 m沖では西に流された。

とくに海底に近いほど流れが速い。帰りが危ないと考え、かつサング帯で石灰層とソデガラミくらいしか種類が無いとの状況が沖に向かっても変わらぬので、中止した。

9月17日。底地^{スクチ}ビーチ、バス賃880x2

正面は砂地の幅が広く、点在する死サンゴの上にも植物は無く、藻場も無し。ただし、汀線近くはウミヒルモが全面に分布するが、葉が出る間隔が長いので空中からは貧弱な分布に見える。

300 m沖のサンゴ帯付近でマクリが点在す。

正面のサンゴ帯から左手の岬に近づくところリュウキュウアマモとのリュウキュウスガモとの藻場が現れ、サンゴ塊に海藻も現れはじめる。しかし、全体治しては貧弱な植生であることは大して変わらず。マクリは多い。

水中写真を撮影した。

特定非営利活動法人熱帯海洋生物環境保全研究会ホームページの35年前の川平石崎は不正確なので底地^{スクチ}ビーチに改名せよ。

9月18日。小浜島の海垣遺跡付近、干潮14・51、船賃\930x2、車（小浜交通5-3830、船の時刻に合わせて20分くらい前に浜に迎えに来る方式）\400x2。

干潮の数時間前で水深1-2 m。

水は透明であるが、しかし、細かな粉が岩塊と植物との上に積もって灰褐色になっているので海藻を採集するとたちまち海水が濁る。入り口前の汀線近くにマクリの優占群落と左方向に藻場とホンダワラ類との純群落がある。ホンダワラ類は正面の沖方向にも多し。

種数は多くはないが個体数が多い。サンゴ帯は近くて2000 mくらい沖となる。

変った種としてはヒメイチョウの大型の個体が汀線近くの左方向の藻場（細くて低い海草）中の砂地に直接根を降ろして10個体くらい密に群生す。ヒメイチョウそのものとは明らかに有意差があり

そうな体高を示す。

イワツタ類はありふれた種のみが生育す。フサイワツタ？は岩および砂底ともに太く長く匍匐枝を展開せり。

港

→

カップまたはスリバチ形のカイメンが点在す。写真を撮った。ムラサメモンガラ（カワハギ類）という派手な模様の魚をまた見たがフィルムが無くなった。

9月19日。黒島南岸。干潮15・25、フェリー12・30発、
帰り15・05と17・30（最終便）、1130x2

ヒメシダツタを狙うべく海中公園（この部分の名前を確かめよ）
センターに寄って尋ねる。

灯台の西の乾震坤大神という名前の御獄前で潜った。

サンゴ礁の上面のようなトゲトゲの1・5 mの崖を降りる。

全面が海藻で覆われ、種数が多く、個体数も多くてすばらしい。
さすが海中公園センターがある島なり。海草と無脊椎動物とは、一
見したところでは皆無。

汀線前の平らな10 m沖まではタノモグサのような種が全面に
繁茂す。その沖は緑、褐、紅藻が適度に混在す。ホンダワラ類は、
着生している場所が20 m沖にあるが、そこを過ぎると叢生して
おり、散在する。迎えの車が来る約束の時刻まで2時間しか無くて
時間不足ゆえ、サンゴ帯まで達し得ず。礁縁までの距離が500

mなので調査し甲斐があつたにもかかわらず、残念。次回に3時間を超える調査をしたい。

9月20日、竹富島コンドイ浜の西500 m幅（岬よりも南）

100 m沖までは砂地のみであつて植物は無し。沖に向かうと植物は豊かとなる。岩上にホンダワラ類、イワヅタ類、海草藻場、マクリ、ヒロハサビテングサが多い。100-200 m沖では海草藻場のみ。砂底上にはイワヅタ類はあまり無し。全体としては種数は少ない。

女子ども用の海水浴場は極端な遠浅であつて石垣の底地^{スケチ}ビーチにそっくりの砂地であるが、そのさらに沖の様子はまったく違う。

岬へは島内交通有り。帰りの最終便は5・45、\520x2、息と帰りの運転手は同じである規約があるようだがそれを先に言わぬから帰りに来た中年女が運転する車に乗ろうとしたら断られたのでどう言う事か怒って文句を言っていたらあとから男の運転する車が来てそれが私が来るときに乗った車の運転手であつた。その男に聞いたら上記の規約があるとのこと。いくらのおんびり型の琉球でも金銭取引では先に約束事を言ってから乗せるべし。石垣の宿に帰って事件を報告したらその女の苗字は与那国とのこと。先島諸島では島の名前まで苗字になっているので笑ってしまう。西表という苗字もある。

9月21日、今日の潮は20 cmしか引かぬ日なので西表の大原に移動しただけ

あずま旅館の評価は次の如し…俺の飯時になると宿のオヤジが俺の風上でタバコを吹かし始めることは困つたもの。標本の固定用の海水汲みは片手の持ち替えなしでの体力的に我慢できる限界であつた。シャワー室、二階の宿泊室、一階の裏口すべてに土足で行けず、一階で処理したら真っ裸で二階に上がらねばならぬことになるし、二階で処理したら靴（裏口の外の水道で洗って）を持って上がるこ

となる。それゆえ干すのはコンクリート製のベランダで、晩に取り入れて窓際の板間の上のガラス戸の枠と内側の障子の鴨居に針金ハンガーで架けてクーラーで乾かすしか無し。朝飯は8・30、晩飯は20・00まで。クーラーはコイン箱があるけれども無料、TV無料、枕にカバー無し。

9月22、西表の南風見、08・16干潮、帰りはすぐに拾い車が出来たが、海岸沿いの奥に集落があるからである。

早々とカサノリが消えているが、まれに残っている個体有り。ホンダワラ類が春の調査時よりも多く繁茂しているように見え、草丈は1 m以上となる個体が多し。

沖の大岩のホンダワラ類賀詞側30 mと南側20 mまで調べた。イワズタ類の新種らしい個体が大岩に近づくにつれて出現し、かつよく発達す（地上茎が長く、直立枝も長く、粒粒の形の小枝の径が大きい。）

テングノハウチワが全面に密生していることは春と同じであるが、体の全面が脱色している個体はかなりある点で異なる。

沖の大岩の西側は2 m深であり、サンゴ砂の海底がえぐられ、石灰藻が有り、様子が東側と異なる。

9月23、西表の古見、09・46干潮、バス賃200 x 2

バス停の手前から舗装道路がまっすぐ海に向かっていている便利な場所。しかし、その左脇に川が有り、その他にも、海図によれば付近に川があるせいで、海図の通りに、沖合い1 kmまで泥が堆積している。沖合い1 kmの推進派1 m。沖合い500 mまでは干潟、300 mまでは干上がるため、海藻がほとんど無く、そこから新種らしい散房状分岐の枝の太さが50 μ m以下のような緑藻が基物すべて（砂上にみえても埋もれた石や貝殻上）に密生す。互いに接する配置となり、その分岐方式上、光合成できるようにするために当然に、決して重ならず。

沖合い500 mからテングノハウチワがかなり見られるが、沖縄島の安田^{アダ}(?)と同じく、互いの距離は30 cmほど離れているものの、接着して2本を生じる例が良く見られた。

1 km沖合いからは灰緑色のカラゴロモが密生し始める。

イワツタは泥および砂からなる海底にはまったく無く、500 mを超える沖合いではじめて岩上に生じるものの、個体数は非常に少ない。つまり、仮根を付着させるには少なくとも砂の径を要し、泥の成分の粒子の径では不安定となるため、根付かぬと思える。

沖合い1 km以上まで調べ、北側のカサ崎の横まで行なった。サンゴ岩が500 mくらいから見られ始め、それまでは泥底なので植生が貧弱。

ウミシヨウブが沖になるほど増え、群落を作る。

9月24、西表の野原崎の西側、09・51干潮であるが、海に入った時刻は10・30、バス賃450+300(どちらも運転手がそう言った額だが、どちらが正しいのかわからず。さすが西表)。バス停の海側にある小屋のビーチヤ(記録が不完全なせいで住人の名前か、表札があるか不明)の脇を浜に下りる道がある。

ウパナリ島

野原バス停

由布島

1 k m沖まで完全に干出する。しかし、干潟ではなくて500 m沖まで藻場となっていて海藻はほとんど無しの砂地である。そこから沖へはサンゴの小塊(20 くらい)が全面に散在するので非常に歩きにくい。しかし、ウニなどの刺す動物はサンゴ小塊の上面に無し。500 m以遠は海藻で完全に覆われる。1.5 k m沖でサンゴ帯となり、死んだ枝サンゴの堆積個所とサンゴ岩塊とが混在している。八重山(白保を除く)および沖縄の他の地点とは異なり、海藻(イワツタ属)がかなり散在し、有節(?)石灰藻が突然出現し、量はかなりある。

←

手書き図を入れよ

1 k m沖くらいからコツブセンナリツタをはじめとするイワツタ類が、琉球で最も密に多し。種類はフサイワツタ、ヨレツタ、ビヤクシンツタ、ヘライワツタ、タカノハツタ、そしてキザミツタを認めた。

ウチワサボテングサは1 k m沖で出現し始めそこ以遠でも多数分布するが、そこ以前ではサボテングサのみを認めた。

ホンダワラ類は3種ほどを認め、全礁面にあり。ラッパモクは2種が沖合いに有り。ヤバネモクは中央部以遠に有り。小気泡が多数生じている種類が藻場帯以遠の全面に生ず。まとめると、生態調査Ⅱ潮間帯の季節変化の研究用に最適の場所なり。浜に下りやすいことも調査活動にとっては利点である。翌年の5月に必ず再調査したい。

地点の証拠写真とサンゴ帯の外の礁縁には濃い土色のウミウチワ

属の種が完全に全面に干出して貼り付いて存在するので泥が積もった干出面に見える景色になっているので水中用使い捨て写真機で撮影した。同時に、汀線からの距離が大きい証拠として風景写真も撮ったがサンゴ礁の幅が500 mくらいあるので、はじまりの30 mくらいのみとし、中止してバスの発車時刻に間に合わせた。

9月25日、新城の土地島の東岸。島への定期船は存在せず、西表島の大富の仲底モーターズ(5-5440)が月曜と木曜とに運行、渡った後の帰りは3時間後に迎えに来てもらう約束、料金は行き千円十帰り5千円＝合計6千円！

船着場から東岸へは20分以下で出られる密林中の獣道がある。ただし浜への出口は戻った際には景色が周囲と似ていてわかりにくいので目印のものを置いておくように仲底さんから助言を受けたので崖下に垂直にクリム色のビニール袋をもたれさせてから潜ったことは大正解であって、沖から見ると磯の物体は白色が最も目立つという理論の適用である。

海中は透明であって泥と砂地は無く、遠浅のサンゴ岩盤のみであり、ところどころにサンゴ岩塊がある。礁縁まで行って裂け目(1 m深)も調べたら、川平の平離島と同じ種が多く、またタカツキヅタが見られた。

ホンダワラ類が全面に有り、有孔虫がその体上に密に付着する個体ばかり。ホンダワラ類は5種以上有り、(ナガ?) マガタマモが汀線付近から礁縁のサンゴ岩盤上までかなり見られた。

イワズタ類がかなり豊富なるも、ホンダワラ類とturf+砂被りのマットの下になっていて隠れている状態なので干潮で<30 cm深では上から見ても見つけにくい状態となっている。

ウキオリソウがかなり見られるが、しかし緑藻かどうかを忘れた。藻場が皆無であるが、その理由は汀線近くが砂地にあらざるゆえ当然である。崖は2 m高あり、そこから直接サンゴ岩盤となる。

礁縁は200 m沖となる。

岩盤の裂け目と礁縁の岩上に生貝（現地語でサザエと言っている）が3個もあることと、泥が無く、エダサングの生きた小枝で礁湖が埋め尽くされていることは、観光化されておらぬおかげであると考ええる。住民の家の周りにはサング塊を積み上げて作った石垣も有るので路地に風情がある。

大原に帰宅後の夜に玉盛スーパーでオリオン・ビールを買って港で飲んで召しに戻って食った後宿の主人夫婦が飯を食い始めたので話し掛けたところ、カミさんは岐阜県の出身とのこと・・・大都会、とくに昔からの航路の関係で大阪出身者は多いが、岐阜県は珍しい。ついでにわかったことは、西表に住んでいる人たちは町から払い下げを受けたのではとんど私有地であるとのこと。

使い捨て水中カメラでかなり写真を撮った。

9月26日、西表の大富、12:00に潜った

大富農園内を通過して20分歩いて浜に出る。その道はパイナップル畑からの雨での赤土流出の流れ道（溝）と同じなので極めて歩きにくく、かつ草が道の両側から倒れ込んできているのでハブが出そうで怖かった。浜が目の前に見えている位置でアダンが密生しているにはシーナイフで葉を切り取る必要があった。シーナイフが陸^{おか}で役に立つとは。

基本的に砂泥底であり、500 m沖まで干出し、また1 km沖から再び干出する。1.5 kmほどにある定置網を過ぎると1 m深となり、陸上からの赤土起源らしい細粉で水が濁って暗いのでサメが怖くて調査を中止した。大形のウキオリソウがサング岩の上に多い地点はここだけである。

イワズタ類は少なく、1 kmくらい沖で出現したのみ。例の新種らしき個体も発達良いが、赤土の栄養分が原因と思う。

500 m沖からオゴノリの太い種類2、3種が多数砂の中の基物および岩上に付着する。

1 km沖から1 m以上の非常に長い個体のホンダワラ類が多く

見られる。アミデグサとナガアミジも枝の分岐が盛んで大きな塊となる。

生きたキツネノオを1個体のみ見たが、脱色して白くなった個体が多数打ち上がっていた。生育場所は不明。

ヒロハサボテングサは1 kmおきから現れる。

この地点で最も特徴的な観察は、大形のカサノリ類が汀線近くから300 m沖までの範囲の干潟に群生していることなり。また、奇妙な観察は、満潮線と思える、浜への出口の前の半分埋もれたプラスチック桶の中に海水が溜まっており、その水面の全周の位置のみに小形のカサノリ類が着生していたことなり。桶の側面を切り取って採集した。礁上のは別種か。

トゲキリンサイの20 cmの塊を見た。

500 m-1 kmの干出砂地は藻場であって幅広のと(種の記録が無い!)ウミマツバの非常に細い個体とが互いに接することなく密生す。

魚などの動物に毒銚を打ち込んで食い、人もたまには刺されて死ぬことがある恐ろしい貝であるアンボイナとタガヤサンミナシについて、やられたことを感じぬ場合には神経毒によって呼吸筋の麻痺が起こり、水深ほとんどゼロメートルの波打ち際で溺れて死ぬことがあると以前に聞いたことがあったので、宿に帰ってから予防情報として八重山保健所に電話で尋ねた。答えは、刺されると蚊に刺されたようなチクツとする痛い痒さを感じるので、感じたならば早く浜に上がって人を呼んで病院に連れて行ってもらうべし。ワクチン類は無いので放置しかなく、直るまで数日かかる。汀を歩いていて足をやられることは無く、採集しようとして手でつかむと肉が出てきて刺される。タガヤサンミナシは砂浜にも生息する。これらの貝の大きさは一定しているので毒力にも差が無いとのこと。本節の執筆のついで宜野湾市消防本部のホームページでアンボイナ貝のページを見つけたので転記しておく。

■ 特徴

殻の長さが10cm程になる巻き貝です。

神経毒のため、刺されても痛みはほとんど無く、体がしびれ、溺れる危険性があり、多くの死亡例があります。

■ 応急手当

(1) 声を出して助けを求めます。

(2) 毒を口で吸い出しながら、起立・歩行が可能な間に陸へ上がります。

(3) 救急車を呼びます。

■ 注意事項

※必ず安静にしましょう。

※呼吸や心臓が止まった場合は、すぐに人工呼吸、心臓マッサージを行い病院へ運びましょう。

9月27日、クーラ橋、バス880x1、

赤はなれ(島)への道は一周道路建設資材を運ぶために作ったものなので、もはや藪になっていて通れず。大見謝川から浜伝いにしか方法が無いと宿の近くの郵便局長が言った。

イワズタ類はタカノハツタがほとんどである。

サンゴ帯では無節石灰藻のサンゴもが優占しており、1m深の広い場所は大形の魚が多種類見られ、サンゴも豊富で見物するのに適している。

砂地の藻場が100mまで続き、その沖は全面が海藻であってサンゴ岩塊上と岩盤上ともに多し。サンゴ砂帯が無いので臨海実習と分布変化の研究に適している。

9月28日、帰京日、飛行機の出発…12…25

1999年4月、沖縄島

当時のバス停と船賃との一覧

8日 那覇ー名護 1740
 名護ー瀬嵩 570
 9 瀬嵩ー那覇バスターミナル 520x2
 10 那覇バスターミナルー辺野古 480x2
 11 瀬嵩ー那覇バスターミナル 520x2
 那覇バスターミナルー辺野古 480x2
 名護十字路ー那覇バスターミナル 140x2
 12 瀬嵩ー那覇バスターミナル 520x2⇒辺野古 480x2
 13 瀬嵩ー那覇バスターミナル 520x2
 那覇バスターミナルー久志入り口 480x2
 14 バスの利用は無し(HITCHHIKEx2)
 15 自動車(白タク) 1万円…安波、領収書あり
 16 自動車(白タク) 1万円…安田
 17 自動車(白タク) 1万円…礎(?)州
 18 瀬嵩
 19 辺野古 520x2+480x2+船 4000領収書あり
 20 HITCHHIKEx2
 21 平良ー瀬嵩 750x2
 22 無し
 23 瀬嵩ー名護 520+名護ー空港 2100+羽田ー日野1
 160

食費…

15日泊まりx4300+8日晚飯+23日朝飯∥¥64500
 +泡盛1合x2∥¥800

4月11日 瀬嵩の、大浦湾の前の左の岩壁の周囲。
 干潮時に汀線からすぐに深く、2mとなる。
 砂底である。海草を含む生物皆無。すぐ左の岩は昨日の雨で泥に覆
 われ、カイメンソウのみがところどころに生育していた。

突出する岩脈を沖に向かって回り込むと生育している種が増える。イソスギナが現れる。突出する岩脈の沖側の汀線のすぐ前も1.5 mくらいの深さがあり、ヘライワツタ、イソスギナがある。

海底も普通の岩盤からなり、泥にまみれるが、(新)産種とおぼしき緑藻の叢が一箇所あり、大雑把な外形はイソスギナに似ているが、茎が極めて丈夫であってナイフでも付着器(根)をはがすことができず、茎部の径は0.5 mくらいであり、短い節状のクビレを有し、4 cm高あり、先端の10 mmくらいが複雑に分岐してタノモグサ状のガマの穂状の輪郭をなす。

4月12日 干潮10..47

07..50米に瀬嵩でバス⇒08..35名護発77系統1番線で09..02に辺野古着

＊ 始発なのに5分遅れで発車した・・・さすが琉球時間。

金網近くの汀線の岩から潜った。湾の1/4幅で180 cm深さとなり、西南からの潮流が少しある上に、おとといの雨による濁りが強く残っていて海面から底が

見えぬ状態でそこそ深い場所を垂直潜水せねばならず、やりにくくて1/4幅Ⅱ東防波堤先端の位置にて中止した。金曜から大潮なので残りの区域はその日に汀線近くの砂地に小石と小サンゴ死骸骨格にフデノホが密生していた。約100 m沖に出るとまずカイメンソウ(キツネノオの記録間違いか)の大きな塊のみが点在し始め、その地帯を過ぎるとカサノリ(Acetabularis ryukyensis?)が死サンゴ片と海草上に密生するとともにハゴロモが多くなる。沖に向かって突堤近くの距離になるとミツデサボテングサが現れ、沖に行くほどに多数散在するようになり、カゴメノリが少数散在するようになり、またハゴロモとフデノホとが多くなり、モヅクが出現し始める。沖高教組の報告のイワズタ類は見られず、岩盤が現れる湾の中央部での調査に期待することとする。

調査した1／4幅全体にてフデノホが多数表れる。イソスギナとカサノリはウミマツバの地上茎の上にも密生する。カサノリの柄は、石灰質を沈着させている性で、乾くともろくなり、360度曲げるとおれやすい。

海草については50m沖からウミマツバが優占し、調査した1／4幅全体に、粗密はあれ、切れ目無く群生し、リュウキュウアマノリとリュウキュウスガモとが極めて少ない個体がある中に点在する。底質は、汀線から離れるにしたがって泥となるが、これは土地改良による赤土の流出の特徴である。

二見入り口バス停には停車する⇒帰りはここで降りて乗り換えることができるが、乗り継ぎ便はセンターに16…45着なので利用無理。写真は、ここが基地なので問題が起きることを避けるべく、撮影せず。

4月13（火曜）、久志、干潮11…33

「久志入り口」バス停で下車した。辺野古用の名護東の辺野古経由。

久志湾の様子は、辺野古と同じであって、湾入した地形に注目して選んだ。

リュウキュウカサノリ（?）が大量に密生す。死サンゴ片にせよ、アマモの茎にせよ、カサノリ類の茎の根からの発出位置が隣の茎に接触して隣接するという極端な密生状態が不思議である。田の種も、ウミウチワを除いて、多量に生育す。この湾の植生は、少数種の多量生育型であると言える。

300m沖にてようやく砂地が現れ、オキナワモツクが多く見られるようになり、ミツデサボテングサとテングノハウチワとが多くなり、ヤレオオギのような大型で裂け目が多い褐藻が増える。とは言っても、サンゴ塊上に点在するのみである。100m沖までヘドロ地帯であり、砂地があってもイワツタは見られず。

カギケノリ（?）が多いが、体が柔らかいので枝がちぎれた姿が動

物を思わせたため採集せず：帰宅後にこの種らしいことがわかった。
。水温がかなり低かったことと、礁縁まで距離がありすぎるので、
また種構成がかなり一定なので300m沖で採集を中止したが、夏の
調査地に300m沖までの調査を目指せ。

4月14（水曜）、干潮12…14、安部^{アフ}…15日のバス記録を見
よ。

バス停の先10mを右に曲がる道を行くとすぐに浜へ出る。植生
は貧弱で中央付近でサンゴ帯となり、サンゴ塊が砂底に散在するの
みとなるが、。

このサンゴ帯には前に沖縄島の久志で見かけたが動物と判断して捨
てた、脱色した美しく複雑に分岐する海藻が密に生育する点が中央
部から沖にかけての植生の特徴である。この種はソゾの類に思える
外観をしているが、質が柔らかすぎる点が奇妙なので精査を様子。
帰宅後の文献調査ではカギケノリのようなのである。汀線近くのサンゴ
塊上に西表で見かけた棍棒状の、マガタマモに似た軟骨質の緑藻が
互いに完全に接して密生しており、往路で上から見た時は上部の中
心面が茶色なので魚卵と判断してしまつて採集せざりしが、復路で
横から見たところ、この問題種とわかつた。

カサノリ属では、cupが深くて明るい緑色である点で、リュウ
キュウガサにあらずして真正カサノリが見られる。

正確に700m幅の礁縁の直前まで実施した。周辺地点との比較
をする必要があるが、ここは陸の孤島のため、交通手段がレンタカ
ーかタクシーしか無く、昨年度Aeonから支給された40万円では
赤字となるのでやらず。

浜への出口付近で尋ねた地元民の話では、突進してきて人が刺さ
れて死ぬ事件が時々起こる恐ろしいダツという魚は、海面を泳ぐの
で顔を上げていれば存在を知ることができるし、人を見れば逃げて
いくので心配無いとこと。

6月にはここをやらずに天仁屋で調査することとする。

4月15（木曜）、干潮12…55、安波^{アハ}、実施場所は部落の手前の浜に近いところ

小島有り、サンゴ礁の幅は400mくらいと狭い。往復で1万円を車を雇い、この北にある安田と楚州にも寄った。

小湾なのでパイン畑の開墾による赤土の流出が完全に礁原全体に及び、火山岩系の岩と突堤の消波ブロックとの上を1cm厚さで覆っている。一方、沖に向かって右に川が流れ込んでおり、その淡水は海水から完全に分かれて上に乗った状態で海に流れ込んでいる。せいで光の屈折率が異なることとなり、湾の底が見えぬ場所が散在する。礁の幅は100mと調査には手ごろであり、くわえて、水温が高くて気温も高かったにもかかわらず、植生が皆無に近かった。湾の右端の突堤の先から入水した。ガラガラ属の種が多く、フデノホと中型のカサノリが目につくのみ。分枝が多くて美しい中型の種名・属名不詳の紅藻有り。カサノリの高さは10mm未満であるにもかかわらず、消波ブロック上の泥に埋もれつつフジツボと混在する様子は健気なり。

突堤に釣りに来た夫婦に尋ねたら北側の1字不明は、雨が降ると崖から鉄砲水が流れ落ちて赤土が流入するので汀線近くが常に赤く濁っているとのこと。湾内の中央部は握っていて気持ち悪いし、入射する光の量が足りずに同様の（意味不明）植生は皆無に近いはずなので調査せず。パイン農家に罪があるのか。そうならばパインの売り値は1個百円とのことなので、そのような安値で自然破壊することは許されぬ。海の観光民宿に転業すべし。

4月16（金曜）、干潮13…37大潮、安田^{アダ}、10…00に宿の前で個人タクシー（?）と待ち合わせして出発⇒12…00開始⇒13…00北東へ

突堤の右側の外は海水浴場であるが、サンゴ塊がある。安田小島にも浜伝いに行くべし。イノーの透明度が極めて高い。波が荒いせい

で礁上を汚染している赤土をサンゴ礁の外の深みに運ぶからである。
？の右と左（小島）の2箇所車で移動して調査する。

赤土の影響は無く、低質はサンゴ砂からなる。カイメンソウ（？）が優占し、ガラガラ類とモサヅキ類が多い。とくに、1／3沖側のサンゴ帯ではモサヅキ類がびっしりと繁茂している。過去40年間を通じて初めてウスガサネを採取した。ウスガサネは、サンゴ帯の中の凹部に珊瑚砂が溜まった場所の縁に体の半分が砂に埋もれて生育していた。安部で見た、紅藻が脱色したような無色の幽霊のような怪しい風情の海藻を汀線から10mほどの位置で多く見た。このように、色が生物とは思えぬ外見なのでひょっとすると動物かも知れぬと思えぬことも無いが、しかし、分岐した体から考えると動物ではなからう。確定させるには内部構造を調べる必要がある。

海草は皆無、と言うよりはむしろ、サンゴ砂の海底部分には何の植生も無し。これはサンゴ砂も粒径が小さいせいであると思う。礁縁前の大体平坦なサンゴ帯の上の凹みにはタマイタダキかユカリに似た柔らかい紅藻類がかなり叢生するようになる特徴がある。

港の突堤の先端で話した釣り人によると、近くの部落である許田の沖への突出部にアサクサノリの仲間であるアマノリ類 *Porphyra* が見られ、女達が自家消費用に採取しているとのこと。この類は琉球では珍しいので、帰宅後に瀬川・香村著の琉球列島海藻目録で調べ、掲載が無ければ新産種なので6月に採集すべし。

4月17（土曜）、楚川、干潮13…50大潮、10…30出発で12…50潜水開始。沖縄島北東部の干潮時刻は那覇よりも30分早いことを知った。個人タクシーには場所別の但し書きで領収書を持ってくるように言った。

港湾施設が無く、小形の消波ブロックが1列のみ設置してある。礁の幅は狭い。汀線付近に有る火成岩の上は赤土の泥で覆われている。海底のサンゴ砂に汚れは無いものの植生が皆無である。礁縁近くになるとアケボノモヅクの類が増える。

新種か新産種と思える茎の高さが15 mくらいと非常に小形のイワヅタ(?)の1種が互いに接して小叢を成して生えているサンゴ岩塊が一箇所あり。

サンゴ岩塊上にウスガサネがあつたが、採り損ねたかも知れぬ。モク類が皆無である点で安田と同じである。褐藻は、コナウミウチワのような小さな種類が沖に突き出た岩脈を回った隣の浜の汀線近くの岩盤にあるのみ。

?藻が多い点の特徴である。

タマバロニアらしい1種と他に新種かもしれぬ緑藻2種が見られた。石灰化が進んで白く見える中型カサノリの一種とフデノホは安波からここまでで普通に見られる。八重山諸島での多数回調査を含めて、本地点でオオバロニアがもっとも多数採取できた。

海草は皆無であるが、その原因は海底の砂の粒が小さいことにあるかもしれない。

4月18(日曜)、低低潮15:03、大浦湾(瀬嵩のガソリン販売店の北側の浜)

サンゴ砂上に火成岩の塊が散在し、かつ岩脈が岬状に沖に向かって突き出ている地形である。直前に大雨が降ったせいで泥が浮遊して透明度が零になっていた。岩脈の前方30 cm地点での進度は1.0-1.5 mであつた。

緑藻…すでに終えた南側にくらべると、カイメンソウが非常に少ない点異なる。ヒメイチョウが有り。干出した岩脈上にヒトエグサと混生して褐藻のフクロノリにしわが寄った形のかすかに茶色がかつた暗緑色の個体が多数群生している。傘の部分が深くて明るい緑色のカサノリの種が数本、同じ点から発出するも海水がひどく濁っているので採取できず。

紅藻…羽状分枝で高さ20 cmの紅藻が群生する。シマテングサのような個体が火成岩の岩塊を広く覆っている。すでに記述した、ほとんど透明で幽霊のような怪しい淡赤色の、植物か動物かわから

ぬ物体が多数発出している。これの叢生する根の様子からはやはり紅藻と思える。

岩脈の周辺では海草は皆無。

(ここからは年月日の記録を調べる必要がある、断片記事である。)
2002年の宮古諸島

港から中心部への路地の先の三叉路？の分岐点にイスラエル人と思える女が飲み屋からのアベック相手に装身具を露天で売っている。渋谷のビック・カメラの交差点にはよくいるが、こんな島にまでと驚いた。

Jan 4, 伊良部島の長山での出来事。

2004年の宮古諸島

今回は全体として最低の出来事の集合であった。(1)そもそもきっかけは9月1―8日という、古来の農家の言い伝えたる「二百十日」と「二百二十日」という時期にことさら渡航せねばならなかったことである。

琉球での調査経験の中で最低の結果となった最初の出来事は、航空券が9月1日に取れたと書いたことの内容にある。宮古行きは全く取れず、仕方なく航空輸送業界用語で言うopen jawにしたためであった。つまり、石垣便が取れたということである。羽田を0630発で石垣に09・30着で同じ日の16・20に宮古行きに乗るというわけ。特許庁での会合が8日の午後に控えているせ

いで、大学での13日の講義に間に合うように帰京日を先に変えることができず、そのうえ日中を丸々石垣で過ごさねばならぬことになって貴重な滞在日数が1日減ったというわけ。

(2) 次の不運は、もちろん台風18号の動きにある。潮汐の関係もあって、結果として八重干瀬で採集できたのは3日だけであった。

(3) いよいよ八重干瀬で採集するときにまたどういうわけか非常に運が悪いことが起こった。宿が8千円でsnorkelと書いてあったので使おうと思ったが、運悪く飛行機でどこかに用事に出かけるとの事なので夜に弟を読んでやってくれと頼んでくれたが明日は運悪く酔う時があり、あさってからなら可能との事。困ったなあという知り合いが船で八重干瀬観光の商売を始めるので船の底を強化ガラス張りにしたのが出来上がって平良の造船所から戻ってきたので1.5万でやってくれと電話で頼んでくれた。引き受けてくれてその晩はまあ良かったであった。ところが、翌日実施した後で代金の支払いを帰り道の郵便局で払い出して行なうつもりでいたので車中でそう話したところ、その船主である仲間さんが突然不機嫌になった。仕事が終わったら直ぐ払うものだ、何で用意しておかぬ、と言う主張。まあとにかく郵便局に寄りましようと言う事で寄ったらこれが運悪く現金機械のコナールがすでに閉まっていた。宿に帰ったらわめき散らして大変困った。

その主張は商売を始めたばかりでこんなことでは縁起が悪いということが主体とわかった。後で女将の話しでは漁師は縁起を担ぐのと言うこと。しかし正式に営業をはじめる前の準備段階の客だと言うことを船の上の世間話しで私が表現したときに同意したから、厳しいビジネスのおきては当てはまらず、個人的に頼んでやってもらったに過ぎないからそんな厳しい言われ方をされるいわれは無い、電車が無い早朝6時半発の便に乗るので羽田で夜明かししてきてひどい寝不足でぼうっとしてのんきになっただけなのに一方的に悪いように言うなとこちらも負けずに大声で反論。でも仲間氏の怒りを

静めるには一部でも金をやるしかないと思いついて。そのときの有り金全部の1・1万を渡すから残りは明日取りに来てくれと言ったら鎮まって帰った。しかしこの人は商売には向かぬ生粋の漁師やから接客術の修行が先ですね。

(4) 採集物を固定するための formalin を8月31日に送ったが6日になっても届かず。宅配は東京から沖縄県へは翌々日に着くことになっていたのでおかしい。航空便でこの薬品を送ることは禁止されているので、ばれたかなと思ったが、それならば連絡が来るはずなのでおかしい。自宅の伝票番号を聞いて調査をしようと思った日は日曜なので月曜に電話したところ、船便に切り替えられ、しかもそのイ船が鹿児島を出たが台風で引き返している最中との事。啞然。ばれたのか台風がらみか・・・やはりばれたのか。確実にするには一週間前に送るしかない。その場合の品名は、コンビニが受け付けたら何でも良いことになる。その電話に女が標準語で明るい感じのよい人であったので、受け付けるときに劇薬であることを正直に書いて、その上でその場合は船便になりますとの選択項目を作ることを社内提案しておいてくれと頼んでおいた。

不運ばかりを書いては読んで楽しくないかも知れぬので、良かったことを数少ないながら書いておく。最高に良かった出来事は内職の特許関係の英訳の納品が締め切りに間に合ったこと。dis ket te を港の船客待合所 terminal 内のエコカフェという伊良部の潜りの案内所でおとし電話 jack を借りて dial up で送ったことがあったので設置してある客が自由に使える PC から添付メールできるかと思いきやこれが普通の address には error が出て不可能な設定になっていた。web site では客が無料で internet を利用できると書いてあるにもかかわらず、図書館や市役所でよくある、web mail か添付は禁止の free mail だけという重大な制限つきの利用のさせ方を民間の観光案内所がやるなんてと、午後から経営者が来るとの事なので改善を頼んでおいた。さて2軒目の依頼先は、おとしには

何かの加減で不可能であった terminal となりの Hotel A to l。結果として成功した。front の友利さん、やっ
てくださって大変ありがとう御座いました。

次は、石垣での不必要な滞在中に、港近くの東バスのターミナルの事務所の二階にある食堂「麦藁帽子」の調理係り兼経営者のような感じの旧知のマダムに会うことができた。3年も間隔が開いたにもかかわらず一年ぶりですねと私を覚えていてくれたことである。前から物腰がゆったりして感じが良くて好きなマダムであったので、「相変わらず若くてチャームिंगですね」と誉めておいたら、例によって同じ席で同じメニューとしてのソーキソバを注文したら dragon fruit をサービスしてくれた。

最後には、池間島で泊まった民宿勝連の女将さんが美人であったこと。数日後に原稿送信のために平良の港に同乗させてもらった車中での話では那覇に住んでいるが、長男嫁なので、爺婆のところ
で半年単身赴任しているとの事。嫁の単身赴任なんてむごい。で、容貌であるが、非常な細面で、虹彩とまつげが琉球的真っ黒で、マブタが二重で、鼻根があるので鼻が長いことによって上品で知的ではあるが情熱的な女という雰囲気が出来上がっている。言葉が標準語になっていてわかりやすく、はっきりした発声であってかつ高めの音程なので明るくて非常に良い。実は東京の自宅から電話で宿泊予約したときの声が現地の人ではないような感じを受けたのであった。那覇に住んでいて美容院をやっているとの事。単身赴任は3年
目で、11月までで、そのあと東京の妹のところに遊びに行くとい
っていた。

次は良くも悪くも無い、中性的な出来事を記す。八千代バスで平良へ行った時に激しい夕立に遭い、まあそのことは関係ないであるが、途中でガス欠になって道端のGSで給油した。路線バスがこう
なるとはさすが琉球、ゆるいいう。

八重干瀬では船の上で10—17時まで過ごしたので、随分話をし、出来事もあったし観察した。その中で面白いと思うものを少し提供する。1) ヨットを世話係り女つきで1日10万で借りて八重干瀬で三日も停泊している人がいるが何をしているか不思議。

2) 完全に潮が引いておらぬ中間の時刻に、上下の服を下着とで二枚着て潜る準備をしてきたのでその日の強烈な日射で暑くなったので海に入って冷やそうとした。ところがこれがどっこい、水深2—3mで潮の流れがかなり早くて西表の外離島の西で経験したのと同じ3ktほどもあって体が流された。足が立たぬ場所どころなるとあせる。しかも悪いことには私の装備は礁原で歩いたり水中で足を踏ん張ったりして採集する目的で土建作業のつま先保護用ゴム引きとなったズック靴を履いているので泳ぐには水をつかめずに完全に不適當。そのうえ左手は採集したものを入れた袋をぶら下げていて右手だけが泳ぎに使える。はつきり言ってpanickになった。仕方が無いから流れに乗って上を向いて、口だけ海面から出して早く着てくれと船に向かって叫んだ。海水を飲むまでには至らなかったが錨を挙げてengineをかけて船を寄せてくれるまでの時間の長かったこと。必死の思いで船にあがったが、前日の深夜までのパソコンでの原稿書きで目を酷使して寝不足となっている体調が影響して目から来た吐き気が生じてきた上にうねりがちょうど酔うのに最適の周期であったので、ああこれは一生で二度目の船酔いが始まるな、吐くかなと思っただが、溺れそうになったときの船との関係での対処の仕方を仲間さんと話しているうちに完全に元気になった。さすが真正海人の俺。

3) 私が上陸したのは定番の、八重干瀬の干潮時に最も浅いイフ(池間ことばで胃の意味)礁の南端であった。ほとんどホンダワラ類ばかり。海藻は一年生が多いので夏を過ぎた時点では枯れて流れるので種類が貧しくて当たり前。後はサボテングサ属の1種とキツコウグサがわずか見られたのみ。琉球海域でこれまで調べたすべての島々の周りに発達する裾礁と違う点はありふれているはずのイ

ワヅタ属が見られた場所（サンゴ塊）が一箇所のみであったこと。

4）原稿送信できるところを探している最中に池間郵便局で尋ねたら、郵便窓口係りの青年に原稿をネットで送れるところを知らんかと言ったトタンに作家ですかといわれて面食らった。何でそうなるのかと尋ねたらサインをもらおうと思ってださ。それだけのことだけど、始めて言われてびっくりしておかしかったから記録しておく。

その他に気が付いたことは次のとおりである。

池間は小さな島なのでサンゴのcalciumが溶けやすいのか、水道の水が硬過ぎである。showerにかかって石鹸で洗った後に髪を拭くときにギシギシ度がこれまでで最高。

最後はただの情報。

1）国土地理院の二倍寸法の特別な2.5万分の一地形図「八重干瀬ヤビジ」500円を売っているところはBookBoxであって、市役所前をもっと先にsuperstoreサンエイをずっと越えて行った左側にある。

2）岡山大の教員が学生を連れてゼミだということで9月9日から一週間社会や文化に関していろいろ尋ねて回るらしい。池間が気に入ったのだそうだ。

3）海洋生物の調査で八重干瀬に傭船する困難さについて。snorkel客と一緒に安く上げようとすると上陸滞在時間が短過ぎるので、相乗りは使えず、一日貸切でないと目的を果たせず。私がこれまで用船した経験は西表の白浜から網取と船浮と外離島であったが、各々1万円であった。ところが5-10kmと遠いせいもあって、ダイビングとシュノーケルとグラスボートの業者は1日（10-17時）貸切（charter）で2万円以上要求する。

港の岸壁の路線バスの終点近くのグラスボートの業者はもと外航十内航の船長を退職した人で、学者は金が無いからなあ、snor

ke l t o u rの無い時間帯に10分でも良いから見せてくれと言ってくる時。ところがその時間帯には干潮ではないから上陸はできぬから無意味になるがね。サンゴの研究者もエダサンゴ、ハマサンゴ、キサンゴと種類ごとに違う人が来ると。サンゴの分類を専門にしている人は日本には東北大の西平さん以外はほとんどおらぬはずだが誰かな。この人は池間島と大神島と島尻（宮古島からの大神島航路の起点）とを結ぶ三角海域を「うがん（大神）ばし（土地言葉なので漢字はない）」と呼んで国定公園にせよ主張しているとの事。環境庁の意見交換会で私が代って発言してやろうかな。

ドイツ（？）人の採集文献による、西洋人の記載への執念を論じる

琉球列島は南西諸島と薩南群島との関係で用語法が幾分混乱

八重山諸島と聞いて場所を頭にすぐ思い描くことができるのは海好きで南方好きの人でしょうね。普通は知っている人の方が少ないと思います。しかし、石垣島ならば気象台があり、ラジオ第2放送の気象通報でも毎日言っておりますので、台風期になればよくテレビでも名前を言っておりますから、少しは知名度が高まるでしょうが、石垣島よりもむしろ西表島の方が山猫騒動からは漢字の読み方の特殊性もあって、印象に残り、有名になりました。

<ここからすべて石垣>

復帰前の状況… 図書館は昔USのがあってジョンソン大統領の写真が飾ってあった。

ユースホステルをしていた石垣さんの家は王国時代の代官であった宮良家の次の位の役人を勤めていたが、結婚式の道路での行列での稲穂の撒き方がまったく違ったので近所の人たちからよく思われておらず。つまり宮良家の場合はモミがついた状態で巻いたので拾って精米したら食えるが、石垣家は精米した米を撒いたから拾っても砂が混じるので拾えず。この事実は家系や人の格が如何に大事かを考えさせますね。

今は無き石垣YHの話とヤシマ旅館との比較

サンゴの保護と開発との天秤；美崎町／浜崎町・・・いつまで続く埋め立てよ

夕涼みがてらの夜釣り

パイプウニ

港の回りに構造物を作りすぎ、グランドホテルも困つとる尖閣諸島上陸した台湾の拿捕された船がつないであつた；騒動のときは巡視船だらけになった。

八重山と宮古で確認したが沖縄島では未見の、琉球独特の香辛料があります。復帰前にはじめて行ったときにソバ屋に置いてあつて知ったのです。香りは酸っぱさが有りますが、味は酸っぱさが消えて唐芥子のなヒリヒリとした辛さです。私はこれが好きで八重山に行った時には必ずまとめ買いしてきます。名前は先島諸島の島ごとに名前が違い、ヒバーチ粉／石垣；竹富／ピーヤシ粉；宮古／石垣空港の売店で、違う名前と聞いたが忘れた。

琉球の人は漁師を除いてほとんど海岸には出ず。この理由は、礁面

が波によって鋭く剣山風に尖っているから裸足で海に入れず、水泳には適さぬため。

西表北岸の「海中道路地図で見つけて、すごいな、グラス・ボートが要らんのかと思っておりましたが、定期バスの運転手に訪ねたら「海上」道路でありました。海の中とは海面の下のことを意味しますから、こんな名前を道路に与えた人は日本人とは違うのかな。地形図にまでこの名前が載っているので、誤りとして通報する必要があります。

西表の「マリユドゥ」滝は、「マル・ヨドⅡ丸い淀み」の意味であるが、極めて多くの観光系案内本では「マリユドゥ」と拗音になっていることは問題である。如何にも現地音尊重のように見えるが、実は学問的に調べず目で見ただけで確かめずに転記したことが原因で生じた誤りである。語末の非拗音の「ウ」はその逆の誤りである。この滝の名前は案内本ではまともにかかれたためしがほとんど無いということは、共通語から見ると間違われ易い運命にある名称であるといえる。この間違い印刷物は、あるうことか、竹富町の観光案内地図にも見られるので、ヤマトウンチュだけに見られる現象ではない。そこで、提案であるが、現地音手技はこの名称についてはやめて、「マルヨド」とヤマト語に音訳したほうが良い。

ヤマトウから来た人に意味が逆に取られることで悪名高い表現である「***しましょうね」は使わぬように学校教育で指導すべきである。方言札時代の話とはこの問題は全く異なる視点からそう提案する。なぜならば、本当に誤解を与えて困ったことになるからである。この表現の共通語での意味は、「私は絶対***するよ」であるにもかかわらず、ヤマトウから来た人は相談されたと受け取るので、否定した場合であっても、客人なのに尊重せずに勝手に言った通りにすると受け取られ、なんやこの人は、えらい性格やなあと思われ

る。伝達の障害になっている表現は共通語を受け入れるようにして欲しい。

伝達の障害にはならぬが、奇妙に感じられる表現が人数を表す単位である「名Ⅱめい」である。ヤマトウでは3人などということをも3名という。学問的になんでこう言う表現を使うのか、歴史を知りたい。ひよっとすると軍隊用語の影響かと思うがどうでしょうか。

西表の「みどり荘」 youth hostelで6月に泊まったら、部屋の壁に空調機(cooler)の有効時間が6-9時と書いてあるのに、夏休みとは違って宿泊者がほとんど居らぬので儲けにならぬせいか、食堂のcontrol switchを7時まで入れてくれなかった。加えて、客が少ないせいで、私の受付のときはお上さんが面倒といって飯と作ってくれぬことになったが、女の二人組には作っていた。なんでこんなに気分屋なんでしょう。適当と見え加減が琉球の特徴ですが、ビジネスでは許せませんよね。

12/Mar - 12/Aprの八重山と沖縄との調査では奇遇の連続が起きましたのでそれを中心に大分書き進んだところでwin95がfreezeしてしまい、その上autosaveが利いておらず、数ページもの文章が流産してしまった。ガックリ。OS/2なら滅多には落ちぬものを、MSの良い加減なOSメッ。ただでさえ次回の25/May - 6/Julyの渡航の前に相当の量の書類(98年分のwvfへの報告書400字*20枚に加えて他の財団への研究費の申請書を5件費用の積算に時間がかかる)を書かねばならのでこのvolunteer随筆を書き直す気が失せました。それで、以前からネタとしてメモしておいたものを列挙してごまかします。

竹富町役場の観光案内所にある本「西表島エコツアー」というよう

な書名の本は買うべし。白浜の金城旅館にも置いて有る。

12/Mar-22/Aprまで石垣、西表、沖縄の3島で調査・採集をまたまた実施してきました。WFとAEO Nとの研究費助成金による調査です。ズック靴をはいて半袖長袖シャツで、下は今回ジャージズボンを忘れたので水泳パンツでという格好で潜ったので、紫外線を防ぐことがあまりできずに真っ黒に焼けたので、hitch hikeではマヤトンチュウーに現地人と思われた。春先は太陽が低いので斜めに射して照射面が広いのでよく焼けるといわれる通りです。この春の八重山と沖縄（「沖縄」は沖縄県の意味のほかに沖縄諸島としての地理的および文化的な意味で現地人は使うので注意が必要）。

ここでは八重山との対照性が良いので後者）では奇遇の大連続で私の人生で初めてのびっくり続きでした。学術的では有りませんが報告したい気分になります。時間が無いので今回はそれ＋アルファだけにします。

1。西表の船浮部落の後ろの山を越えた反対側の浜で東京の渋谷の専門学校で教えた生徒二人がツアーガイドとして就職していてカヌーだかシーカヤックだかで浜に乗りあげていた。雨が降りそうであったので、すぐ潜ることに嫌気がさして浜を暫く歩いていたら突然「先生」と呼ばれてギクツとしました。その上彼らの宿舍が私の宿である金城旅館の真後ろの壊れそうな廃屋でして、その旅館とツアー会社とは契約していて客と宿の玄関のホールで打ち合わせをするのでありました。私の宿泊最終日に彼らと深夜飲みながら双方の仕事の話を面白くおしゃべりしました。

2。沖縄の瀬嵩の晩飯を宿の飲み屋的な座敷で取っていたら、DUGONGという言葉が聞こえてきた。飛行機で個体を探したなどの

話しが聞こえてきた。私の沖縄分の研究費はDUGONGの餌としての海藻の分布を調べるという課題なのです。ついでに海藻の分布も当然調べる形です。マスコミのINTERVIEWのような雰囲気であったので便所に立ったその聞く側の人がこちらに来たので何なのか聞いたらはやりのNGOで、DUGONGを守る会とかいった名前の団体であることがわかりました。その人の名前と電話をメモしてくれたので、帰京後にweb siteで探したら似た内容のpageが見つかったのでemailで尋ねたらその会のものがありました。6月に合同で調査することに考えが一致しましたが、日程が合えばよいが。

3。瀬嵩以北の東岸は人跡未到のような地域（「山原ヤンバル」です）なので定期バスは有りません。しょうが無いので、3地点はタクシー運転手の夜勤務の人が昼寝ているのを起こして雇いました。その後バスが通っていて少しは近いように思えた（山道なので実はクネクネで遠かった）地点へ行った帰りに停留所に時刻が書いて有りません。しかたが無いのでhitch hikeしようとしたら車内から手を振ってにこにこするでは有りませんか。???。運転者が降りてから乗せてくれと頼んで話しているうちに人違いであることがわかった。

これだけなら奇遇では有りません。その翌日、近い地点でして、バスも有りますが、本数が非常に少ない（儲からぬため補助金でやっている通学バス状態）ので帰りの待ち時間が3時間と我慢できぬ長さ。再びhitch hikeすべく親指を立てたが夕方で暗くなって来たせいかほとんど止まってくれず。ようやく止まってくれたら次の部落までという。でも少しでも近づいた方が良くと考えて乗せてもらってその安田部落で次の車を探せるか共同売店の販売員のおばさんと話していたら横で会釈した人が居た。その人は昨日乗せてくれた人。いやあ奇遇ですねまた乗せてもらった。後でわか

ったことはこの辺の人は時刻表をはがして持ってかえって自分で使うとのこと。その上バスの座席にはガムが塗ってあって、私のズボンに5cmにべったり。ひどい僻地の人間が必ずしも素朴で真面目とは限らぬことがわかった。はつきり言って私は山原人を怒っております。

前にも書いたように、竹富町役場の観光案内所のカウンターの上に置いてある「西表島エコリズム」というような書名の本は買うべし。2500円。自然環境の説明だけでなく、歴史も面白い。30年前から行き来しておるにもかかわらずぜんぜん知らなかったことが書いて有ったためになりました。復帰前の図書館のうちの立派なほうは琉球民政府つまりUSが建てたほうであって、ジョンソン大統領の写真が飾ってあった。今は市立図書館が立派なので、長期滞在中に調べ物をするにもそうは困らぬはず。県立図書館が市立の分館以下の水準なのが面白い。

市立図書館には琉球コーナーがあって、生物関係も珊瑚礁の調査報告書もあって、専門的にも役に立つ。学生時代に泊まっていたYOUTH HOSTELである石垣氏邸YHが10年くらい前から全国YH HANDBOOKに載っておらぬので止めたのかなと思っております。

石垣港前の根本荘のおばあさんとおしゃべりしていた時にその話題を出したら海に飛び込んで自殺したとのことで驚いた。奥さんの長期入院のせいらしい。昔の思い出が消えた気がして残念。ご冥福を祈るのみ。

石垣港の前は次々と埋め立てており、数年置きに行きたびに新しい町の名前ができております。サンゴの保護との関係はどうなのか、気になります。美崎町／浜崎町／八島町……いつまで続く埋め

立てよ。港には夕涼みがてらの夜釣りをしているひとがおり、自動車であつて車内宿泊。家に居ると暑いせいとのこと。8月の時には尖閣諸島上陸した台湾の拿捕された船がつかないであつた；騒動のときは巡視船だらけになつたとのこと。

ヤマトウの大新聞を講読しているところはほとんど無いことが面白い。地元の細かな動きがわかつてためになる。地元の八重山毎日新聞がほとんど。宿屋は沖縄タイムスと琉球新報とを取っているところが多い。ヤマト（本土）の大新聞は恐らく取っているところはHOTELしかないはず。この地元新聞を詳しく読むといろいろ当然にも地元情報が得られて面白い。購読したいが郵便料金を加えると高くなるので断念。

石垣の市街の交通標識には台湾語が併記してある。定期観光船が寄航するようになったゆえですね。

先島諸島に独特の香辛料があります。復帰前に石垣にはじめていったときにソバ（実体は細いうどん）屋に置いてあつて知つたのです。香りは酸っぱさが有りますが、味は酸っぱさが消えて唐芥子のなヒリヒリとした辛さです。私はこれが好きで八重山に行った時には必ずまとめ買いしてきます。名前は先島諸島の島ごとに名前が違うよう、で、ヒバーチ粉／石垣；竹富／ピーヤシ粉；宮古ではヒバーチ。

珊瑚礁の礁原の表面が非常に鋭くなっているので履物をはかぬと痛くて歩けず、つまり水泳には適さぬため、琉球の人は漁師を除いてあまり磯には出ません。そのため、溺れても発見が遅れて助かりにくいので海洋調査は数名で行つた方がよい。と言いながら予算の関係で私はいつも独り。今回からは時間順に報告します。羽田では今回初めて荷物検査の直前に、以前そうすることを決めた、DIVER'S KNIFEが問題となるので通常は何も預けぬ旅行B

AGを預ける事を思い出したので、KNIFEだけ放送で呼び出されて別のところで受取る面倒が無くてよかった。

<八重山> ??? 年5月と 7月

西表の西部での用船は池田米蔵氏（定期船の船浮海運の社長）が距離で料金を変えているので合理的（方々に行くにはもっとも安いことになる）。復で、崎山Ⅱ1万、網取8千、外離れ6千円。この情報と直接関係はないが、西表の網取で帰りの待ち合わせ場所が枝珊瑚がぎっしり生えている地帯であったため、膝までボキボキずぶずぶと沈んで歩けず、よろけてDISENEYLANDのVINYL BAG（蓋無しの大口あけ）の口を海水に漬けてしまった。中を見たが水滴が少し付いていただけなのでかまわず、宿に戻って翌日の予定を見ようとPALM TOP PCのHP200LXをONした画面が点灯せず、顔面蒼白（電話番号と行動予定を始め、研究テーマや琉球情報など等のDATAを道を歩きながら思い付いたら入力しているのでTOWER型母艦PCには通常は転送せぬため、副本が存在せず壊れたら人生が終りといえるくらいの被害が生じるので）。ちようつがいを始め、隙間にはすべて水滴が付いており、こちらあかと覚悟を決めました。DATE情報を保持するBUTTON電池が電流が流れて直ちにCASEの塩を吹いておりましたが、しかし、MEMORYCARDは水滴を拭き取った後も錆びず、救われたものと考え、LX本体を中古で三万円でNIFFYのBBSから買いました。ところ、memory cardの記憶は無事でした。

3月では外離島^{フカバナリ}へ雨の中を強行出港してひどい目にあったが、その外離れに裸で住んでいる長崎さんがテレビに出たと6月に訪れた沖縄島の辺土名の民宿ヤンバルクイナのおかみさんから晩飯時に聞いた。

海洋生物採集で渡島する人に注意Ⅱ

…3月に安栄観光の西表側の送迎バスの運転手に私が車内に持ち込んだ10kg塩ビBAG（半透明）入りの液体の中味を下車時に聞かれて咎められたので、7月に石垣の定期バス会社である東運輸^{アスマ}の事務所で法律を確かめてもらったところ、FORMALINの車内持ち込みは、「旅客自動車運送事業等運輸規則の第5章旅客、第52条、物品の持ち込み制限の第9項」で禁止されておることを知りました。

この5月から7月の八重山と沖縄との40日間の調査ではいろいろな面白い体験をしました。なかなか書く時間が取れません。琉球で海洋生物を採集して本土に輸送する場合に、海藻ではフォルマリンを海水に10%の割合に溶かした液に一晩漬けてから液を排出して宅配で送ります。ところが今回の5月ー7月の沖縄島調査ではこれが簡単ではないことがわかりました。電話帳で数軒理化学器材屋にあたりましたが、肝心のフォルマリンの工業用が在庫が無いのです。石垣島よりも条件が悪い。しかしおかしなことですよ。石垣のヤマト商会は沖縄から仕入れているのになぜ沖縄では入手できぬのか。石垣でヤマト商会に、船で送りましょうかと言われた意味がわかりました。

フォルマリンは西表では当然入手できませんから携行する必要があります。安栄観光の船なら荷物だけを無料で運んでくれますが、向こうの船着き場で受け取る人が待っている必要があるので、前もってはいちよつと難しい。容器は、漁協に頼んで、モヅクの出荷用の1.8L缶のポリエチレンの大きい袋付きを540円で分けてもらいます。臭気が漏れぬように口を結ぶことができて都合が良いのです。この処理には海水を汲んでくる必要があるので、港のそばに有る宿をとる必要が有ります。今までは松屋旅館を常宿にしておりました。

が、今回は港湾労働者で満室になっていたため、紹介してもらってサザナミ荘という運輸省の外郭団体が建てた、現在では全国でも3軒程しか残っておらず、港湾労働者の仮眠施設という看板で実はホテル形式のしっかりした建物ですし、冷房が時間無制限で無料なのが気に入りました。ただし基本的に素泊まり3500なので、二食付きでは5600円と少々高くなります。ここの管理人のご夫婦は大変親切でおかみさんが朗らかなのも気に入りました。しかし、この系統の施設は閉鎖する方向に有るので、ずっと存在するかどうかが心配です。肝心の労働者が泊まらずに教員や研究者の利用が多いとのことですので、なおさら閉鎖の理由になりますね。

話しは戻って、去年の夏には西表の上原で悪名高きハブクラゲに足首をやられました。すぐ浜に駆け戻って座り込んで普通の方法である砂を摺り込んだのですが、後で警戒ポスターを見たらその方法を取ってはいけなかったのです。いずれにせよ、浜の前の家の奥さんが出てきて正しいやり方である酢を2瓶掛けてくださったので、事無きを得ました。しかし、普通はミミズばれになるとのことですが、私の場合には白い閃光が走ったような模様が残っただけで不幸中の幸いでした。

西表の白浜には宿屋が金城旅館1軒しかない。一人だと部屋があいていても断るので注意すべし。そのわけは、後でグループが来たら泊めそこなって損をするから開けておくの事を近くの軽食喫茶の団さんから聞いた実は団さんが電話してくれて泊まる事ができたのであった。互いに商売で融通しあっているからとのことである。近所で断れぬ人に電話をしてもらったというこの手はおぼえておく。と役に立つ。その喫茶店には貝殻標本が1万数千点有り、すべての人が昔集めたもの。寶貝などの飾りものになる種類はもう全く無くなっているのはそのせいでは。その店で飯を食べていたら西表でヒルの採集をする女性研究者が来て、家が団さんの東京の家の近く

とかで話しがはずんでいた。採集したヒルはアイスクリームの小型カップに入れておくそう。対象によってそれぞれいろいろなやり方が有りますね。団さんは土地の生まれであるが、ご主人は元NHKのカメラマンだそうです。

沖縄（琉球内でこう言ったら沖縄島のことですよ）のいわゆる山原ヤマハレーまたはヤンバルの東海岸、つまりいわゆる二見（バス路線の南部と北部と西部との分岐点であって、バス停がある）以北はなかなか興味深い地名が揃っております。琉球の地名はそれが元になって生じた苗字と共に、普通でも変わったものが多いのであります。しかしここではちよつと違った視点から見た、変わった地名を挙げてみます。

大和ではありふれた苗字や地名あるいはそれらの変形であるため、まさかこんな読み方をするとは、というものがこの沿岸には三つも並んで存在します。それは、安部、安田、安波です。それぞれこれらの読み方は、アブ、アダ、アハなのです。アベ、ヤスダ、アワではありませんよ。

日本語の二大方言である本土方言に対立する琉球方言が平安時代の発音を残しているとの国語学上の定説を裏付ける大変興味深い発音が現用されておることを確かめることが出来ました。路線バスの車内アナウンスで聞いて我が耳を疑ったものなのです。それは、「テイマ」です。漢字では汀間です。テイマではありません。さらに駄目押しなのは、道路標識にTeimaではなくてTimaと正確に発音を写した綴りで書いてあるのです。このことから、Hepburn式のローマ字が誤りであることがわかりますね。訓令式が正しいことが歴史的に証明できるということです。ta, chi, tsu, te, toではなくてta, ti, tu, te, toが正しいのです。

裏石垣の吉原で拾い車したら運転者は腕に刺青をしている若い男であつた。しまったと思つたら、やはり、であつて、同乗していた若い女とすぐに口論をはじめ、そのとたんにひどい高速乱暴運転になつた。死ぬ思いで後部座席の「つかまり取っ手」を握り締めて、無理な追越やら民家の間の狭い抜け道やらを経て命からがら港にたどり着いた。この男はヤシガニを夜に餌でおびき寄せて捕まえて料理屋に売って生計を立てているとのことだが、野生生物保護の観点からどうであろうか。まあ、真正三下893らしい雰囲気であつたから高級な話は向かぬが。（ここまで年度が新しい部分⇒すべて転記したあとで年代順に配置を変えよ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0045q/>

琉球の海で40年間： 海洋生物調査日記

2011年1月10日20時26分発行